

短歌小梯

本間文庫

文庫 14

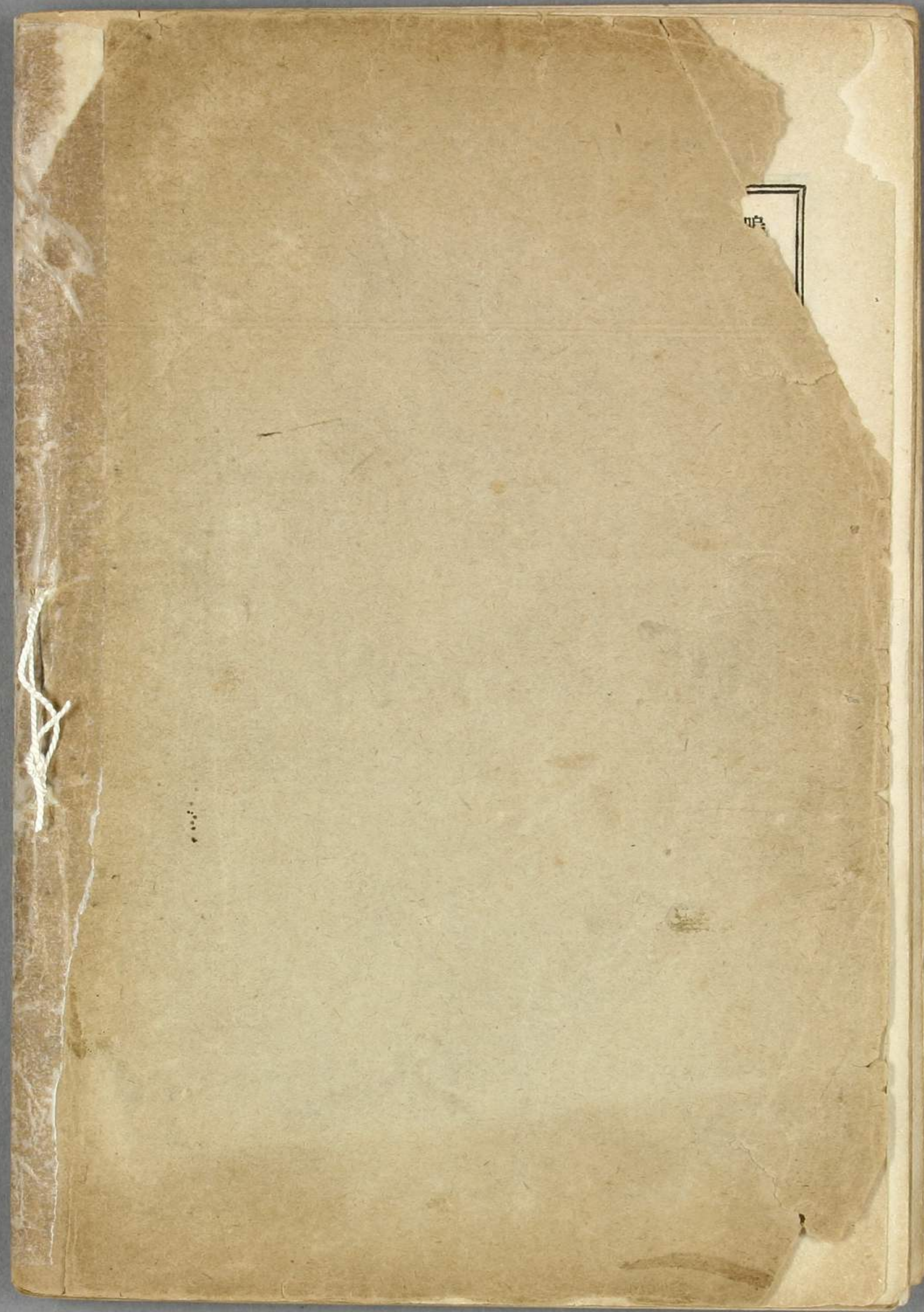
D 65





吳  
水  
經







文庫14  
D65

序に代ふ

御手紙有難拜誦 熟睡せよ 風を引くな 何時もながら御厚  
情には泣かれ申候

この頃になり何故に小子に軍人になれと強ひたりしかと御思  
召され候由、以ての外の事に候、若し小子に所謂文士たるこ  
とを御慫慂被下しならば小子は軍人になりしやも知るべから  
ず候、總じて隠くすものは見度く、勿爲といふことは爲て見  
度きは人情と存候、兄上が餘りの御小言なりしたため、ぬけつ  
かくれつ、ついでに其妙味を覺えろめ、迷ひ愈深くして酔  
ひ、酔ひては忘れがたき文學に一生の運命を捧げし物なるべ  
くと自らは存じ居申候、この間も一色が参り西條時代の話大  
に榮え申候、彼の時は小子自身 軍人の氣であつたのやら何



やら、解も、シヤ、ガもわからずエラガッタものと被存申候、  
借御手紙にては歌といふもの始めて見たく、如何やらの書よ  
り門には入るぞとの御試問、小子は嬉しくて嬉しくて實は夜  
も寐られず覺え申候、酒のんで慰藉を得ることも、文學を愛  
して慰藉を得るとも同じやうには候へども文學の慰藉は醇よ  
りも更らに濃く一度酔ひては一生忘るべからず、快感絶ゆる  
時ならずして誠に魔力ともおぼしき程に候

御尋ねの本にては武島氏の新選詠歌法といふもの稍よろしき  
やうに候へども、故人の説に同氏が修辭學を加へたるばかり  
にて、新らしき研究とまではゆき不申、うたの山口其他種々  
の詠歌自在若しくは和歌作法など申す書は三十一文字を拾ひ  
集むる者のためには恰好の著述に候へども、未だ自ら歌を作

らむとするものゝためにはなり申さざることに存じ候、古人  
の書も多くは漫然五音七音の句をならべて初學の思想を拘束  
したるものに御座候、歌は音數の拘束は仕り候へども、内容  
の拘束は仕らず候、

以上申述べ候如くにて目下の處初めて門に入らむとせる人々  
の讀むに適當したる著述は一冊も無之候、これは小子等同人  
の遺憾とする處に御座候、就いては甚だをこがましき事には  
候へども序を追ふて小子が思ふ所を記し見申べく、甚だ傲慢  
らしき致方にて御氣に觸れ候はむかなれども小子は兒上の歌  
を初めて見たいといふ御言葉のうれしさに、左様な些末のこ  
とは暫く抜きと致し、直ちに今回より書き初め申候まゝ、御  
得心のならぬ處は幾度も御質問下され度。別紙は禮讓の語を



取り除き、簡潔を主として書き試み申し候、小子は臍の緒切  
つてからの嬉しさに御座候、先人これを見玉は如何に思し  
めさむかと存じ候。母上の尙この世におはしまさば、歌の上  
手におなり遊ばされはせじやなどくだらなきこと迄もおもひ  
つゞけられ申候。恐々

十月念三

兄 上様

義

郎

### 凡 例

一、順序は必ずしも一定の順序によつて居ない。この種の著は類例を見ない。ので、随つて創始に属するがために不完全の點は多いことであらうと思ふ。

二、書中引く所の歌は多く萬葉集から取つた。是れ平生予が愛誦の結果記憶に存して居るからである。他の集より引いたものは其書名若しくは作者の名を記して、萬葉集中のものは往々記してない。

萬葉艸 盧主人



短歌小梯

目次

第壹編 總論

短歌とは何ぞ

空間的美と時間的美

廣義の詩

狹義の詩

詩の形式

短歌の詩形

短歌の内容

叙景、叙事、抒情



短歌の極致

短歌と他の詩

短歌の生命

吾人の希望

第貳編 短歌の研究 上

短歌の研究(其一)

句

句切れ

体言止め

各句切れの得失

句割

短歌の研究(其二)

文法上の破格

短歌の辭様

省略法

省略せらるゝ語句

倒句法

倒句の利

重言法

重句法

短歌の研究(其三)

枕詞

起原

枕詞は一種の形容詞



枕詞の種別

枕詞の利

序歌

序歌の利

懸詞

第參編 短歌の研究 下

既に作られたる作物の研究

柿本人麿の作歌

與謝ノ女王の作歌

叙景的抒情の歌

長奥麻呂の作歌

藤原定家の翻案

萬葉十六の歌

紀ノ貫之の作歌

藤原俊成の作歌

源實朝の作歌

賀茂真淵の作歌

香川景樹の作歌

高崎正風氏の作歌

小出粲翁の作歌

佐々木信綱氏の作歌

竹の里人氏の作歌

第四編 結論

趣向



用語

調

趣向と用語

調と趣向

第五編 補遺

短歌會論難記

第貳回短歌會論難記

第參回短歌會論難記

第四回短歌會論難記

短歌小梯



森田義郎

第壹編 總論

短歌は新体詩、俳句、長歌及び其他のすべての詩と同じく、言語をかりて感情や想像を美的に表現する詩の一躰の名てある。

ろもく激越したる感情、若しくは想像を美的に表すものに二種ある。即ち繪畫、彫刻、建築などのやうに、専ら空間的



のものによつて表現するものと、音楽詩歌のやうに時間的のものによつて表現するのとである。繪畫、彫刻、建築を空間的美術といふことに對<sup>ひ</sup>て、音楽詩歌をば時間的美術といふても、無論差支のないこととて、詩は到底美術上の製作品たることを免れない。しからば詩の一體である短歌もいふまでもなく美の標準に據つて左右せられるものである。廣義の詩とは、言語文字をかりて、感想を美的に表現したる製作物である。それを形式から分けると、散文詩、韻文詩の二つとなる。散文詩とは言語文字に一定の拘束のない詩で戯曲、小説などの類である。言語文字に一定の拘束のあるものは狭義にいふ所の詩、即ち新体詩、俳句、長歌やわが短歌の如きものである。

拘束ある詩と一口にいへば至つて不自由であるやうなれど、これがために思想の統一をはかることが出来、字句を整齊することが出来、文字以外に讀者に刺撃を與へることも出来易く、散文詩に於ては見るべからざる妙味と活動とが出来、其外音楽美といふ非常な感動力を持つて居るものも、この拘束から得られるのである。丁度兵士が個々の活動が出来ないのは戦争で、一寸不都合なやうに聞えるが、決してさうでない。一人一人の戦争よりも窮屈なやうな全隊での働が効果の見るべきものがあると同じである。今一ついつて見れば廣漠たる野原で角力をして面白くない。狭い土俵ですればこそ角力の面白味がある。即ち一種の美術的技巧の上に多大なる勢力があるので、この拘束の



必要が生じたものである。

言語文字の拘束ある詩、これを換言すれば一定の形式ある詩が新体詩、俳句、長歌、今様、旋頭歌などいろ／＼あつて、いろ／＼の形式を守つて居るが、わが短歌の形式はどうであるかといふに、至極簡單で、音數から成立つて居る。

豊國ノ鏡ノ山ノ岩戸立テ隠リニケラシ

マテド來マサズ

手持女王

の如くに、五音、七音、五音、七音、七音の三十一音數の詩形を有して居るので、三十一音詩といふ人もある。

短歌とか俳句とかいふことは、其形式によつて區分したのであるが、これを内容によつて分ける時は

一 抒情詩

一 叙事詩

一 叙景詩

の三種となる。この内容によつて區分した時に短歌はそのいづれに居るものであるかといふ問題が勢提起せらるるやうになるが、短歌は時に抒情詩であり、又時に叙事詩、叙景詩である。即ちいづれにでもなることが出来る、あらゆる美的の感情及び想像は自由自在にいひあらはすことが出来るのである人の言の如く短歌は抒情でなければならぬ事もなければ、叙景に限る事もなく、それが自己の感情であれば作つたものが抒情になり、それが景色であればいふ迄もなく叙景になるのである。

敷島ノヤマトノ國ニ人フタリアットシ思ハト



何カ歎カム

これ自己の感情、即ち主観を詠じたもので、いふまでもなく抒情詩の適例である。

志賀ノ海士ハ、メ刈リ鹽燒キ、暇ナミ、篋ノ小櫛

トリモ見ナクニ、石川少郎

これ人事則ち事實を詠じたもので、叙事詩である。

クレナ井ノ、二尺ノヒタル、蒿薇ノ芽ノ、針柔カニ

春雨ノフル、正岡子規

これ庭前の光景即ち客観のみを詠じたもので、立派な叙景詩ではあるまいか。

さてこの抒情叙事叙景のどれともつかぬもの即ち混体のものが尠くない。

君待ツト、ワガ戀ヒ居レバ、ワガ宿ノ、簾動ガシ

秋ノ風吹ク、額田女王

ミ吉野ノ、山ノ嵐ノ、寒ムケクニ、將ヤ今宵モ

我獨リ寐ム、文武天皇

これらは純然たる客観でもなく、純主観でもない。情を抒べむとして景をかりたものである。この外、景を叙さむがために情をいふやうな例は古來の歌に最も多い。情をのみをいふ時は露骨に落ち易く、景のみをいふ時は平淡に流れ易い。この弊を救ふために、自然と、この叙景的抒情詩若しくは抒情的叙景詩を生じたものであらう。短歌ではこの混体のものが古來最も多く従つて最も發達して居る。情景共に至るといふのが短歌の極致ではあるまいかとも



思はれるのである。

以上で短歌は三十一音の至つて簡単な詩形を持つて居るものではあるが、抒情となる事も出来れば、或は叙事詩、或は叙景詩、或は混体ともなれる、即ち其簡單なる形式に反して内容は詩のあらゆるものを盡して居るといふことが確められた。

然らば他の詩、新体詩、俳句、長歌、今様など、比較して其長短優劣如何といふ事であるが、これを解決するのは至つて、容易である。即ち各長短優劣があるといふ事である。新体詩には新体詩の長所があるが、それと同時に新体詩の短所もある。俳句、長歌、今様いづれもその通りで、短歌にいひあらはすには非常に困難で、大手腕を要する詩材も俳句であら

はすには雑作のないこともあれば全くこれと反對のこともある、それでも明瞭な事で短歌の生存は其長所があるからであるといふの外はあるまい。

次に短歌の運命如何といふ問題であるが、短歌といふ名目にして没することの出来ない限りは短歌の生命があるので、よしんば數十百年の後短歌を新に作る者がなくなることもがあるとしても、已に作られたる製作も共々に討死をしなければならぬ、即ち全く其跡を絶たねばならぬといふやうなことはあるまい。數十百年の後の世になつて其時代の教育を受けた者の頭腦が、三十一音詩によつて運ばるゝ天地間の秘音を聞き分けて美を感得するだけの能力を缺いて、何が何やら一向にわからず、いはゞ吾人の子孫ではあ



るけれども吾人の如き眼なく、耳を失ひ、感情を失うやうになつたならば、短歌の生命はあるまい。否恐らく文學美術といふものが全く跡を絶つてあらう。けれども吾人の子孫が吾人の如き感情を有し、美を愛好する天性を持つて居るならば、其間は決して短歌の氓滅を見ることは、願ふても出來ないのである。其内容なり句法なりが今よりも一層激しく變化することはあらう、一時は誰もふり向かないやうに一般社會から歓迎せられぬ時もあるやう。けれども尙大に研究せらるべき餘地あるわが短歌は一朝にして氓といふやうな心配はないのである。短歌の詩形は前に述べた通り如何にも簡單である、世の中といふものは簡單から複雑に向つて進みつゝあるのである。

の短歌は上古未開の單純時代の思想をあらはすのに適して居つたもので、今日の如く社會の事物萬端複雑となり、吾人の如く思想の複雑になつた者には、其複雑の思想をあらはすに適當したる、他の或物を求めねばならぬ。短歌は到底其器でない、今すこしく大なる詩形を要するのである。短歌の如き單純なものは棄てゝしまはなければならぬ、かういふ議論を立てる人が當世甚だ乏しくない。なる程短歌が複雑な思想と伴なつて行かうといふのは難事である。けれどもそれがために直に短歌の運命を卜して、最早生命なしとを投げるに至つては、謬見といはねばならぬ。複雑な思想をあらはすに短歌を用ゐるといふのが、ろもその誤りである、複雑な思想をあらはすにはそれ



どれそれ相應のものをを用るればよい、何も社會の事々物々  
 が複雑になつたがために、單純な思想感情が美を失ふたと  
 いふてもなければ全滅する譯合のものでもない。譬へば  
 子供が七歳の時に一貫目の重量の物しか持ち支へること  
 が出来なかつた、今十五歳になつて十貫目の重量の物を支  
 へるのは左程困難でもない。然らば此少年は二貫目の重  
 量は今支へることが出来ぬかといふに、決してさうではあ  
 るまい。それと同じこととて社會が會て非常に單純であつ  
 たが今は複雑を極めて居る、それが爲に單純といふことは  
 絶無となつたといふやうなことはない。複雑になればな  
 る程單純なるものゝ數をも増して居るので單純なものゝ  
 美も昔よりは増して來て居ることは疑ひのない事である。

これを若し或る他の方面から考へて見ると、世の中が複雑  
 になればなる程、簡單を貴び、迅速を重んずるやうになる、ツ  
 マリ百言を費すよりも虚禮を避けて三十言で済むことな  
 ら三十言、十言で済めば十言で済ますといふやうになる。す  
 れば短歌のやうな美の一要點を捕へて人に非常な感動を  
 與へる、即ち寸鐵殺人的の短詩の必要を感じて來て、一般社  
 會から大に歡迎されるといふやうになることは必然で、論  
 者のいふ處とは全然反對の結果を來たすやうになるかも  
 しれぬ。

數學上より見て短歌は三十一音數から成立して居るもの  
 で、音にも限りがあるから錯列—Combination—及び順列—Permu-  
 tation—より生じて來る問題で、限りある發音を限りある數



の排列にするのであるから短歌は直ちに仄減するといふことである。これには其分子—Elements—の—つ加はつたが爲めに排列數がどの位増すか、—つ減じたが爲にどの位減少するかといふことも考へねばならぬ。我國古來の發音數が四十八音に濁音數二十を加へて六十八音として三十一音の排列上いくらの數を得るかといふに二十幾桁といふ數を得る、この數は想像すべくして先づ實數で見ることには幾十百年先かも知ることが出來ぬ。して又同じ排列でも、句の切り方、若しくはアクセントで全く別物となることもある、一例をいはず『ノドカナルカスミノヘノニホヒナリケル』といふ句があるとする、甲はこれを讀んで、『長閑なる霞ぞ野邊の句ひなりける』とした乙は『咽喉がなる糟味噌の屁

の句ひなりける』と讀んだ、どちらも讀方として誤謬であるといふことはいへぬ。この例の如きは數學上限るべからざる事ではないか。それのみでなく各國との交通が頻繁となるに随つて外國音も次第に這入つて來る。Vの父音より發する音、若しくはWの如き音などは我國古來の發音にはなかつたので、ツイ近頃出來た音である。今の發音數には限りあるけれども今から先どのやうに増加するやら分らぬ。一音の増加する毎に來たす排列數の相違は又大したものである。吾人の發音數が増せば短歌に用ゐる詞も増加するのである。半濁音、拗音、引音、促音、撥音などを自由短歌の上に使用するとすれば二十幾桁は又増して幾十百桁になるかもしれぬ、僅か三十一音數の排列であるけ



れども、人間の發音し得る音數がいくつて、これからいくつ増加して其以上決して増加しないといふまでは實際無量數である。排列法より見て短歌の運命を卜するなどは如何にも薄弱な議論である。

短歌の生命は量り知るべからざるものであるが、既に作られたるものに澤山立派なものがあればそれを愛誦して文學を樂まうといふことになるが、既に作られたる短歌にして日夕吾人が愛誦して樂まうといふ程のものはいくらない。寧樂朝、藤原朝と平安朝の始めとに僅かしかない。其時代後一千年といふものは殆ど短歌らしき短歌を見なかつたのである。古今集以後の作は無趣向に傾き徒らに同一の字句を繰り返し、唯單に三十一音數の形式さへあれば

ば短歌であると心得て

イツノマニ 空ノクシキノ 變ルヲム 激シキ今朝ノ

木枯ノ風 新古今

吹ク風ノ 色ノチシホニ 見エツルハ 空ニ亂ルル

紅葉ナリケリ 萬代集

などいふやうな趣向として創作といひ得ざる作物をも短歌として世に傳はり、遂に構想といふ言葉が短歌を作る上からなくなつて陳腐平凡の持ち切りとなり、いくら考へたものは理屈になり駄洒落に陥り、一首として價值あるものを見ることが出来なくなつて、今日に及んだのであるから、萬葉から直ちに今日に續いたやうに思はれる位で古今以後一千年の作物は眼中に置く價值がない、實際短歌とし



て價值ある即ち貴重し、愛誦すべきものは實に寥々たるものであつて、今後吾人の鋤を入れて、吾人が趣向によつてあらはるゝものこそ誠に生命ある作物なのである。一千年間真正文學として價值ある短歌を見ることが出来なかつたのは、わが文學史上喜ぶべき事ではない、けれども天が吾々明治の青年にこの事業を残して呉れたのだと思ふと、吾々は非常に幸福な者で、美神の寵兒かのやうに自惚が出て来る。この寵幸を双肩に擔うからには如何にして良製作を得るかといふことを心配せねばならぬ。

## 第貳編 短歌の研究

良製作を得やうといふには、是非とも短歌に就いて研究する所がなくはならぬ事であるが、この研究に

- 一 既に作られたる作物を解する事
- 二 製作物の鑑識力を養成する事
- 三 自己が進んで創作を試みる事

の三種の研究がある、

若しこれを専門的に研究するとなれば、歴史上の只一人の作物を研究することもあれば、或時代の短歌のみに就いての研究もあらう、地理上、動物上、植物上等の研究などに入り



込むこともあらう、けれども是等は最早美を標準とせる短歌の範圍を飛び越えて科學の領域を侵したものである。かういふことは各人々の研究に任かせて置いて、今は短刀直入に、如何に短歌を解し、如何に作るべきかに向つて解決を與へやうと思ふ。

既に作られたる作物の句法を解し、其音調を解し其趣味の那邊にあるかといふことをも知り、而して其良否を判断することが出来た時には、自ら進んで製作を試みるといふことも、至つて容易になつて來ることと思ふ。

### 短歌の研究 其一

短歌を内容より區分して、抒情、叙事、叙景、混体の四種とすることは總論に於いて、既に説いたが、外形から區分すると、どんなものになるであらうか。形式はどこ／＼までも、五音、七音、五音、七音、七音といふ音數のシラブルによつて居るのであるが、この五音なり七音なりの一つを句といひ、初めの五音を一の句(又は初句)以下順次に二の句、三の句、四の句、五の句(又は結の句)といふ。

忘レメヤ」使ノ長ヲ サキ立テ、 ワタルミ橋ニ

ニホフ橋

新勅撰集

是れはあらはれたる形式の上からいへば、一の句切れとい



ふのである。切れる、といふのは全い意味があらはれて居て其上に断止のいひ方を用ゐてあるのをいふのである。

梅ノ花、吾ハチヲサシ「アヲニヨシ 奈良ナル人ノ來ツ、見ルガネ

是れは二の句で切れて居る。

久方ノ 天ノ露霜 オキニケリ」家ナル人モ

待チ戀ヒヌラム

是れは三の句切れてある。

シラマ弓 今春山ニ ユク雲ノ ユキヤ別レム」

戀シキモノヲ

是れは四の句で切れて居る。五の句で切れるのは普通の話で、五の句切れといはなくてもよい事であらうと思うが、

今でもいふ人もある

子等ガ名ニ カケノヨロシキ 朝妻ノ 片山岸ニ

霞棚引ク

いふべくば、これ等が五の句切れてあるが、五の句に限つて止めといふ、その方が適切のやうに思はれる。而してこの歌のやうに動詞で止めてあるのを動詞止めといふ動詞止めといふのに對して

春日ナル 羽交ノ山ユ 佐保ノ内へ 鳴ユクナルハ

誰喚子鳥

といふやうなのを躰言止め(又は實句止め)といふのである。一の句で切れるのは多く倒句(下にいふ)である。これは新古今時代に、盛んに流行したもののらしい。一首の中の主要



な點を先いふて仕舞う。始めにやまをさらげ出すので、いはゞ醫者、辯護士の玄關見たやうに先荒肝を取る、前六を張るといつたやうな調子で、あまり面白い句法ではないと思う。何故なれば、初めに自己の感想を表白してしまふから次々讀んでも左程面白くない。甘美かんびと思つて喰ふよりも突然喰ふ方が甘美い、立派だと先聽きかされたものにさう立派なものは尠ない。二三四と順次に調子か重くなつて、行く／＼人の腦裏に浸み込んで行くのが當前である。イヤナリと忘れめやては何が何だか一向に解わからない。窮して窮して窮しきつた句を初句に出すからして頭が重い、どんなことが出て來るかと思つてる、左程の事でもない事が出て來る。従つて二の句以下といふものは動き出すとい

ふ鹽梅になる。

一体この句法の起りはどうだか知らぬが、盛んに用ゐられる發達したのは後鳥羽の朝で、其發達たるや、無論病的の發達である。其頃は宮中に於いて、歌の技を戦はす歌合うたあひまなるものがあつて、これにて人の賢愚、才の有無は勿論の事、立身出世も詠歌の巧拙に依つて左右されたので、何がな目新しいことをして、賞讃を博しやうとなつて來るのは、人情の免れぬ處で、色色と各自巧を弄した時分に、初の句で人の膽を奪ふ、即ち前六を張つた、やまをかけた。このやまがうまく圖に當つて一時の流行を來たしたもので、一種句法の上には發達を見たのであるけれども、善良の發達ではなくて病的であつた。



三の句切れは古今集時代に盛んに行はれたので、これは五七調が七五調に變じたために起つたものである。これが一般に行はれて一、二、三までの句を上句といひ、下二句を下句といふやうになつた。上の句、下の句といふことは歌本來の性質上より見る時は些も根據のないことである。二の句切れは五七調であつた萬葉時代に盛んに行はれたもので、調子の上からは完全したものである、時として單調に流れる恐れはあるけれども、調子として最もよくしまつて居る。七五調は元來冗長に流れ易く五七調は簡潔になり易い、冗長を避けて簡潔に従うといふことは韻文を學ぶものゝ取るべき筈の所である。

四の句切れは五の句と轉倒して置いたものと、四の句まで

ていつてしまつて、五の句で再説するものがある。

春サレバ 鶉ノ草クキ 見エネドモ 吾ハ見ヤラム

君ガアタリハ

これは五の句と轉倒して解すべきもので、散文的連絡を離れて、平板に失するの弊を救ひ、音楽美を喚起せしめる一手段として四の句切れを用ゐたものである。

吉野ナル 夏實ノ川ノ 川淀ニ 鴨ソナクナル

山陰ニシテ

これは四の句で立派に光景をいひ顯したのであるけれども、尙こゝろたらず思ふので五の句を加へて、鴨のなく川淀の景を更に明瞭ならしめたのである。

この四の句切れも二の句切と同じく五七の調より得らる



るので、句柄から見ても調子の上から見ても、若しくは思想配列の上から見ても最も其躰を得て居る。

三の句切れは七五調になつて流行したといふことは前にもいつたが、今この五七調と七五調といふことに就いて少しくいつて見やう。

短歌の形式は誰れが始めたといふやうなことはわからな  
い、極古くは三十一音に限ることもなければ、五音七音とい  
ふこともなかつたのであつたが、追ひ／＼作つたり歌つた  
りして居るうちに、國語の性質を知るともなく知り、悟ると  
もなく悟つて來て、五音七音の連絡といふものが出來たの  
で、其以前に十音と三音もやつて見たであらう、七音と、五音  
をやつた人もあつたであらう、種々な人によつて種々な經

験の後、五七の連絡が最もよく調つて居て歌ふに都合のよ  
いといふことを暗々に悟つて、この句の連絡なり句法なり  
は出來上つたのであらう、換言すれば優勝劣敗の結果であ  
らう、五七の連絡は音の輕重が工合よく配合されて居る、五  
音の調は緩にして七音は急である、輕くして緩なるものに  
始まつて重くて急なるものに終る。

一の句(輕) 二の句(重) 三の句(輕) 四の句(重) 五の句(重)  
五音 七音 五音 七音 七音

この句法が五七調でゆく時に二の句もしくは四の句で切  
れるといふのが最も其體を得たものであるといふことは  
一見して知らるゝことである。七五調でゆく時は多く三  
句切れを用ゐるからして始めが輕さに過ぎる、これを實例  
で見ると最も早くわかる。



終夜ヨルナ

思ヒヤルコソ

悲シケレ

イカナル空ニ

月ヤ見ルラム

香川 景樹

内容はしばらく置いてこの調子がどうであらう、悲壯な感じなどはすこしもない、始めが餘りに軽く、四五の七音七音の句さへ、七五調にいつて居るやうに思はれる、五音の軽いので出たために重いので結ぶのであるのに、軽い調子で結ぶから愈たまらぬ、併し七五調にいつて居て、結末だけ七音七音の重いものでやつた日には、輕重の度を全く失してしまふ、それがために止むを得ず矢張七音五音の調子で七音七音の句をこしらへたのである。

打チ日サス 宮ニ行子ヲ 眞悲シト トムレバ苦シ

遣レバスマナシ

これと對照して見てどうであらう、同じ悲しいことでもこれを誦する者に與ふる感じの強弱は自ら知れて居るであらう。輕、重の排列より來る處の感じは直ちに其内容の輕重に關して來るのである。換言すれば五七調は人の感じの上に音樂美を使用して、うまく聽えさすやうに出來て居るのである。

然らば何故七五調が出來たかといふに人は單調に飽き易い、五七調を數百年聽きなれた人には七五調が珍らしく聽えたので、本來の性質も何も忘れてこの調にならつたものだと思はれる。丁度この頃ある人が到底常識を以て解すべからざる、句法を用ゐて一種の躰を創めた、所がそれを眞似る人が出來、今では新何とか社といつて『明星』といふ雜誌



まで出てるといふやうな滑替が目の前に演ぜられて居るが、これと同じこととて、この七五調は以外の成功を見たのである。

七五調を短歌の上に用ゐるといふことは、前述ふるやうに本来の性質を破壊するので、是非短歌の形式を変更する必要が生じて来る、この必要に應じたのが「今様」である。

フルキ都ニ、來テ見レバ

淺茅が原トゾ、荒レニケル

月ノ光ハ、クマナクテ

秋風ノミゾ、身ニハシム

後徳大寺實定

是れが七五調のキツスイで、遺憾なく其長所を示して居るいやに憐れぼいのが特質である、其流暢にして迫らざる所

が最も長とする所である。

短歌の

五 (七(一連句) 五 七(一連句) 七(結句)

とやうに自然となつて居つたものが

五七五(一連句) 七 七(一連句、うち二音以上で、にをは

を無意味に用う)

僅か三十一音数中で、只場所を填める、即ち其詩形を保持するだけに、ある音数を犠牲にするとは、餘りな話ではあるまいか、七五調は流暢である、それは多くので、にをはを用ゐるからである、結句の七七は七五となるべきを一連句として二音数だけ冗長にするのである、初の五七五の一連句の如きも、五七の二句でいへるものを多くは五七五の三句を費



すのである。

短歌に五七調を用ゐるのは其本來の性質上止むを得ぬこととて、五七調を用ゐるがために勢二の句切れ若しくは四の句切れが、其体を得て居るといふことは確かである。

今スメル 月ヤ都ノ 空ナラム 思フ人ミナ

ミエ渡ルカナ

香川景樹

この歌の句法はどうであらう、今迄あげ來つた句法とは些相違の點があるであらう、即ち

今スメル月ヤ(一句)

都ノ空ナラム(一句)

思フ人 (一句)

皆見エ渡ルカナ(一句)

とやうに、一句が一句でなくて、音數上の一句が割れて、他の句と接して、初めて其意を解することの出來る一句となるのである。これ等を句割れといふ、句割れは句々の獨立を阻害する、即ち固有の詩形を破壊するもので、是れから得る所は句法に變化あらしむるばかりである。多くの場合でこの句割は調子を損じ、句品を墮し、曖昧なものにして仕舞う恐れがある、既に固有の詩形を破つて、短歌は五七五七七であるといふ、特種の約束以外に出ることであるから、讀者に異様の感じを與へ、句法が散漫亂脈に流れ易いのである。一首でこそ三十一音であらうけれども、其句の成立から見る時は前掲の作は

八音 九音 五音 九音



である、かうなると厳格な意味に於て、短歌といひ得るや否やは一疑問である。短歌以外のあるものとなつて居るのである。句割れは句としての多くの、ものを犠牲に供して敢てするだけの價值あるものでない。多くの場合これを避くることに注意しなければならぬ。

歌短の研究 (其二)

韻文は何時も文法上に於て、多くの散文と其趣を異にして居る。之を俳句で見ても、短歌で見ても、著しき相違の點を認めるのである。又修辭法は散文よりも多く用ゐられて居る、語句の轉到や、其省略は常に用ゐられて居るので、たゞに一般の散文よりは、いづらか解し難く、趣味を捕捉することとも、始めはいづらか困難を感じるのである。文法上の相違といふのは多く現在格と過去格、他動格と自動格とにあるのであるが、是れは短歌特有の辭様であつて多くは誤りでない。例へば

タワヤメノ

袖吹キ返ス

飛鳥風

都ヲトホミ



一般の文法學者はこの歌を評して、文法上不都合の點があるといふ。吾人短歌を學び、短歌の研究に従事して居るものより見る時は些の誤謬をも發見することが出来ない。文法學者は『袖吹きかへす』は現在格である。これは明日香<sup>ア</sup>の宮より藤原宮に遷都になつた後に、志貴の皇子が獨り猶、明日香に残つて居られて詠まれたものであるから『袖吹き反す』は『袖を吹き反し』といはねばならぬ。さうでなくては『徒に吹く』といふ結の句とも對應せぬといふ議論である。是れは文法を知つて歌を知らぬ話で、かへすの下に『所の』若しくは『べき等』の語が省略されたもので、日常の言葉をかりていつて見れば、

今も茲に都があつたならば、この明日香を吹く風は、宮中に出這入りをする、かはいらしい女どもの着て居るあざやかな衣の袖を吹きかへすのである。然るに藤原に御遷都になつたことであるから、そのやうな優に艶なこともなしに風が吹いてるわい。との内容なのであらう、すれば文法學者の説は短歌を解せぬものではあるまいか。

淡路ノ 野島ガ崎ノ 濱風ニ 妹ガムスビシ

紐フキカヘス 柿本人麿

文法學者は『濱風に……紐吹きかへす』は自他の格が間違つてるといふ。が併しこれも吾々から見れば、すこしの間違も認めえない。濱風にあひて若しくは濱風によつてとい



ふやうな語が省略されたものだと思ふ。  
近い頃の話に、學兄樂燒道人の作で

何ゲナク庭ニ下リ立チ 植込ミニ 來居ル鶯  
ニガシツルカモ

これを或人が「來居る」といつて「逃しつる」ではをかしく「來居し鶯」でなくては掛合はない、といふ説を出したので、世の文法をいふ人、この類のみと思つた。考へるまでもなく、來て居つたのを逃したのぢや。文法學者といふのは丸て解らないことを詮議立てするものであるわい、と一笑に附してしまつた。こんなことが大方の文章など、文法なり語法なりが違つて居るのであらう。文法上、必ずあるべき所の動詞若くは副詞、接續詞にて

を「は」の省略されて居るのを以て、直ちに文法の誤謬とするのは以上の如くである。是等は決して誤りと見るべきものでない。

語句の省略法は、韻文に於て決して珍らしい例ではない、殊に短歌の如く音數を以て詩形をなせるものには最も珍らしくない話である。語句を省略するため、散文的語脈を離れ、冗長の弊を脱して餘韻を生じ、散漫ならずして簡潔の妙を得易いのである。

明日香川 水往キマサリ 彌日<sup>ヒケ</sup>日ニ 戀ノ増レバ  
アリガテマシモ

普通の散文を解するのと同じ頭で、この歌を解したならば、そのことやら了解に苦しむであらう、これは即ち省略法を



用ゐたもので、二の句と三の句との間に『の如くに』の語の省かれたものである。これを口語にあらはす時は、

明日香川の水は昨日よりは今日、今日よりは明日と日に日に増さつてゆくことであるが、その水の増すやうに吾夫を戀ひ慕たふ自分は、立つても座つても居られたいものぢやないわい。

とやうのものになるのであらう。それを其儘にいひあらはしたならば、韻文として誠に心細いものであるが、巧に省略法を用ゐる露骨を避けて、語氣を強くし、多くの餘韻を持たし、一字一句も改めることの出来ないやうに成つて居る。動詞の如きも文章に於ては必要なものであるけれども、韻文ではこれを省略するために、タルミを免れることが出来る、

る、

樵歌 鳥ノサヒヅリ 水ノ音 ヌレタル小草  
雲カ、ル松 井出曙覽

この作は(善悪はさて置き)一つの接續詞をも用ゐず、動詞も悉く合名詞になつて居る。如何にも極端ではあるけれども名詞と名詞との間(この歌にては即ち句と句との間)のことは總て讀者の聯想に待つたものである。是等はすこし例外の話で曙覽にして始めて出來たのである。俳句にも、奈良七重七堂伽藍八重櫻

又は

髻奴 腰黒茶碗 男女郎

などいふのがある。今の所謂新派と自稱する手合には多



くこの省略法の加減がわからないやうに思はれる。これは大に注意すべきものであると思う。この種の作歌を解釋する場合には、文字にあらはれたるところから推して、文字以外のことを考へて其趣味を感得することにとめなければならぬ。茲に省略法をゐたる二三の作を例の萬葉集より摘記して見やう。

秋ノ田ノ穂向ノ據レル(其穂のごとく)片據リニ君  
ニヨリナ言痛カリトモ  
人言ノ繁クキ君(ゆる)ニ玉梓ノ使モヤラズ(い  
つ)も思つてる事なれば決して(忘ルト思フナ  
流ラフル雪吹ク風ノ寒キ夜ニ吾春ノ君ハ(旅

に在ることなれば)獨リカヌラム。

廬原ノ清見ガ崎ノ三保ノ浦ノユタケキ見ツツ

(居れば仙人のやうな氣がして)物思モナシ

向ヒ居テ一日モオチズ見タレドモ厭ハヌ妹ヲ

月ヲタルマテ(見ねば誠に心苦しい)

人皆ハ今ハ長シト(人皆は)タケイヘド君が見シ髪

亂レタリヒ(一向にかまはぬ)

上にいふべき語、若くは句を、下にいひ、下にいふべき語若くは句を、上にいふこれを倒句といふ。倒句は散文的連絡を離れ、平板單調に流るゝ弊を去つて變化を自由ならしめる所の一方法であつて、殊に調子——音樂的美を發揮せしむるのに必要である。



三芳野ノ 玉松ガ枝ハ ハシキカモ 君ガ御言ヲ  
持チテ通ハク

普通であつたならば、『三芳野の玉松が枝は君が御言を持ちて通うといふ結構なことである』といふやうに、一の句二の句四の句五の句といつて三の句に来るのが、言葉の順序であるけれども、それでは音楽美を失ひ、散文的に流るゝの恐がある、故に倒句法を用ゐたのだ。

イヅクニカ 船泊テスラム 安禮ノ崎 漕回行キシ  
棚無小舟

普通の語法ならば、三、四、五、一、二、と続くべきである。

石見ノヤ 高角山ノ 木ノ間ヨリ 吾振ル袖ヲ  
妹見ツラムカ

四、一、二、三、五となるのが普通の語法である。

春霞 立チニシ日ヨリ 今日マデニ 我戀ヤマズ  
モトノシゲ、バ  
櫻緒ノ 苧生ノ下草 露シアレバ 明シテイ行ケ  
母ハシルトモ

一、二、三、五、四として解釋すべきものではないか。

是れ等は皆一句の倒句であるが、只單にある語のみ轉倒して居るものも鮮くない

天雲ノ ヨソニ雁ガ音 聞キシヨリ 斑霜フリ  
寒シコノ夜ハ

この歌の五の句は『この夜は寒し』といふのか普通である、けれどもそれでは一首の調が如何にも平板で、散文的口氣が



あつて、転すれば説明的に聞えて感情の上に立つ詩歌として如何はしくもなつて來るので、語を倒にして調を階へ説明的口氣を脱せしめる手段を取つて「寒しこの夜は」としたものである。

今日ヨリハ 反リ見ナクテ 大君ノ 醜ノ御楯ト

イデ立ツ我ハ

などもこの例である。

時に省略法を用ゐて、動詞、接續詞、副詞若くは「てにをは」を省略する短歌は、又時として同じ韻の語、若くは動詞接續詞等を重ねて、聲調を調ふることがある。五七の音數を繰り返すわが短歌は、更に其全く同じ句を繰り返して音楽美を感ぜしめ、又は一層激越せる情を惹起さしめることがある。

北山ニ タナ引ク雲ノ 青雲ノ 星サカリユキ

月モサカリテ

山城ニ 急ケ鳥山 イシケイシケ 我愛妻ニ

イシキアハムカモ 古事記

我妹子ニ フルトハナシニ 荒磯ヲニ 吾衣手ハ

ヌレニケルカモ

ユキテ見テ 來テ戀シキヲ 朝香瀉 山越ニオキテ

イネガテヌカモ

是等は重言法の稍單純な例である。同じ韻の音を重ねるものは連鎖韻となり、若くは首韻となり脚韻となることの間間あるけれども、韻を踏むことは到底わが國詩、殊に短歌に強ひることの出來ぬ話で、よし韻を用ゐたものが出來て



居たとしても、それは豫め期せずして、圖らず打ち當つたもの  
のと思つて差支ない。

前に掲げたものは重言であるが一句を繰り返したものの、即  
ち重句法ともいふべきものは

我ハモヨ 安見子得タリ 皆人ノ 得ガテニストフ

安見子得タリ

足引ノ 山ノシツクニ 妹待ツト 我立チ濡レヌ

山ノシヅクニ

梅ノ花 今盛リナリ 思フドチ カザシシニシテナ

今盛リナリ

重句法は語を鮮くして自ら意を長からしめ、情を深からし  
めるばかりでなく、断えむして續き、起らむとして忽ち止ま

る。反復數回、餘韻嫋嫋、そゞろに人の心を動かす所のものが  
ある。一言にして數萬言を用ゐて説破するのに勝ること  
があるのと同じ理であらうと思はれる。

短歌特有の句法は以上述べ來つたやうなもので盡して居  
るであらう。誇張、譬喩、反語、疑問、擬人、風喩などは一般の修  
辭學が説く所と大差ないと思ふ。でるれ等は世に其書に  
乏しくないことであるから、その専門の書に就いて見らる  
る方が、間違もなく、了解もし易い事と思ふ。



## 短歌の研究 (其三)

足引の山、久方の天の原、梓弓春といふやうな一種の辭がある。この足引、久方、梓弓等は枕詞(一に冠辭)といふて、我國特有の修辭である。

世の中の物はすべて實用に起つて、裝飾となるのが常例で、今日吾々が衣服は元來寒暑を防ぐ實用から強ひられて起つただけけれども、今ではいろくくと是に裝飾を施して一面に外貌を飾り立てゝ居る。家屋より膳枕の如き日目の什器からしてろの通りである。この枕詞も始めは實用上起つたのであるが、有史後は専ら一種の裝飾に用ゐられて居る、太古言語の未だ發達せざる時分には澤山の發音がない。

同一の發音で種々な用を足したもので、或時は体言となり、或時は動詞となるといふやうな時にそれを區分して、誤謬を避けるために、枕詞は起つた。世の發達に伴うて、發音の數も多くなり、事々物々が複雑して來て、簡略に出来るものは可成簡略にしなくては間に合はぬことに成つて、枕詞は韻文に據つて其餘命を絡こぎとめたのである。

枕詞は短歌に音樂美を加へて、格調の上に美感を惹さしめ、散文的連絡を斷つて崇美の念を興へ、露骨淺薄に陥らずして、現はさむとせる主物に對する感じを強める、一種の形容詞の如き用をも務める、

眞木柱、太キ心ハ、アリシカド、コノ我がコ、ロ  
鎮メカネツモ



これを誦する時は如何なる感じが起るであらう、大丈夫、鬼をも葬ぐ大丈夫、吾は曾つては天下をも併呑する程の大志を持つて居たなれどこの今歎く歎きをば、能う鎮めずに、まるで女のやうに女々しくして居るといふその両面の事實が、ありありと目瞳の間に浮んで来るやうではないか。眞木柱太き心なるが故に、山が崩れかゝつても動ぜぬ、といふ感起り、この上なるが故に、下のこのわが思ひ鎮めかねつてもが、誠に女々しくクシ／＼して居るやうに聞えるのではあるまいか。これをもし、

男ノ子ワレ 太キ心ハアリシカド コノ我思ヒ  
鎮メカネツモ

又は

丈夫ヤ 太キ心ハ アリシカド コノ我ガ思ヒ  
鎮メカネツモ

としてどうであらう、調子の善悪はさて置き、眞木柱太き心とあるやうに強い感じは起るまい。

茜<sup>カカチ</sup>サス 日ハテラセレド 烏玉<sup>ヌスビ</sup>ノ 夜ワタル月ノ  
カクラクヲシモ 柿本人麿

『茜さす』と『烏玉』の二つの枕詞を用ゐてあるがために平常の晝の一層あかるく思はれると共に夜は一層くらく思はれる。

枕詞は一定のものでない、日といふには必ず『茜さす』といはねばならぬ譯のものでない。一首の歌の上で動かすべからざるものを取り用ゐねばならぬ。徒に場所填めに用ゐる



のでは徒に其効がないのみでなく語の鮮い短歌をして愈語を鮮なからしめるもので、最拙劣な仕方といはねばならぬ。今茲に『いさ見の山を高みかも大和の見えぬ國遠みかも』といふ二の句以下があつて初句のない歌があるとして其初句に枕詞を用ゐたいといふ時に、單にいの字にかゝる枕詞を求めたならば梓弓、しらま弓、的向ふといふやうに射といふ語の縁でかゝる枕詞や八十足らずなど(五十)の縁でかゝるものなどがいくらもあらう。それで

梓弓イサミノ山ヲ高シカモ大和ノ見エヌ國遠ミ鴨

しらま弓……

的向ふ……

八十足らず……

として見た所で枕詞が一向はえない、随つて面白くもない。かういふ時にはよろしく一首の精神に渡つた枕詞を取らなければならぬ。石上大臣は

我妹子ヲイサ見ノ山ヲ高ミカモ大和ノ見エヌ

國遠ミカモ

とした。一枕詞『我妹子』はこの一首の骨子である。『大和の見えぬ、噫我いとし妻が戀ひ待つて居るであらう、その大和の國のあたり、一向に見えぬ、して見ると郷を去をこと甚だ遠いのかしら』といふやうな切なる情の躍如たるを認めることが出来る。かうなれば枕詞の効の大なることは自然判明するであらう。

近頃世に心得ぬ歌人(?)があつて、枕詞の無用を説いたが、枕



詞の無用を説く位ならば其前に韻文の無用を説き、美文亡國説でも立てるのが勝つて居る。

この枕詞には意義のあるものと、全くない只同じ音を重ねたやうなのとがある。吾々が今後用ゐるのには或る特種の場合を除くの外は成るべくさきの「我妹子を」流に有意味にして用ゐたいのである。たゞ枕詞が階調のみのため用ゐらるゝ時はこの限りではない。

枕詞は成立の上から區分すると

同音の語路によるもの

三吉野の吉野 梓弓 春(張)

比喩したるもの

春草の 茂き 足引の 山

性をいふもの

千早振る 神、 ことさへぐ 唐、

故をいふもの

空見つ 大和、 眞金吹く 吉備、

形の上から區分すると

名詞形

草枕 旅、 梓弓 春、

分詞形

安見し、 我大君、 高光る 日の皇子

文句形

眞金吹く 吉備、 天さかる 鄙、

よし、くはし、等の形容詞の附く形状言形



はしきよし 我家、なぐはし 吉野、

の、なす、じもの、等の附く比喩的形狀言形

なく鳥の 間なく時なく、

泣く子なす 音のみなきつゝ、

鹿シじもの 膝折りふせ、

が、に、を、や、等の助辞を加へて續く名詞形

うなる兒が うちたれ髪、

山の端に 出雲、

打ウツ麻マを みをの大君、

菅原や 伏見の里、

この枕詞を受くる詞は、名詞動詞形容詞である。

『我妹子をいさ見の山』などの『我妹子』は、作者が非常の苦心の結果でなくては得べからざるはいふまでもないが、今吾々が枕詞を用ゐるに就ても、茲に新らしく作るとしても常に非常な苦心を経なければならぬ。徒らに山であるから足引、天だから久方では仕様がなない。

枕詞が單に音楽美を増すための任務を以つて居る時には有意味即ち働きがあつては厭味に感ずる、この場合には無意味の枕詞——同音の語を重ねて——其調を整ふる方が淡泊で聽官の感じも有意味のよりは善いやうに思はれる。

枕詞に更に技巧を加へ、色彩を施したるものが序歌である。五音一句のものを枕詞といひ五音七音の二句以上連続したものを用ゐて出來上つたのを序歌といふので、枕詞に有意味のものと無意味のものがあるのと同じく序歌にも有



意義のものと無意義のものがある。枕詞は創作とのみに限らない、随分昔のものを用ゐるが、序歌の序は主として創作せられて居る。有意義無意義共に主物に對する感じを強く美しくせしめるためのものであることは、枕詞と同じよとである。

明日香川

川淀サラズ

立霧ノ

思ヒスグベキ

戀ニアラナクニ

山部 赤人

詩人綿繡の腸を抱いて古京に遊び、古を懐ふて去る能はず、立霧の川淀を去らぬが如くに情のやるせなきを歌つたもので一、二、三の句は目睹する光景を叙して序としたもので、是れ等は有意味の方である。

マスラヲガ 得物矢タバサミ 立向ヒ 射ル射ル的形ハ

見ルニサヤケシ

舍 人 娘

的なる一語に縁ある語を借りて、色彩を施したものである。作者の意は『的形は實に景色のいゝ處で、見て居ると氣が清清する』といふのにあるのだけれども、これだけでは文學として美を標準とせる短歌にいひあらはしても、餘りに平淡である、今少しく技巧と施彩がなくてはならぬ、そこで作者は只的の一語を捕へてこれに粉黛を用ゐて一首の歌を作り上げた、この歌の序は無意義である。

玉鉾ノ 道ユキツカレ イナムシロ シキテモ君ハ

見ムヨシモガモ

足引ノ 山田守ル翁 置ク鹿火ノ 下コガレノミ

我戀ヒ居ラシ



天雲ニ 羽根打ツケテ 飛ブ鶴ノ タヅクシ鴨  
 君シマサネバ  
 タラチネノ 母ガ蠶ノ 眉ゴモリ コモレル妹ヲ  
 見ムヨシモガモ  
 我妹子ガ 赤裳泥チテ 植シ田ヲ 刈リテ藏メム  
 藏ナシノ濱

皆、序歌の適例である、意義の有無に關らず、いづれもみな其趣味を捕捉するに難くはあるまい。枕詞、若くは序歌の一轉したものは懸詞である。懸詞は一語であつて二様の意をもつもので、多くは感情に訴へずして智の判断に據るので、そのために、不快の念を引き起すことが往々にしてある。

立チ別レ イナバ(去なば 稻葉)ノ山ノ 峯に生フ  
 ル松(待)トシキカバ 今歸リコム 在原行平  
 大江山 イクノ(行く、生野)ノ道ハ 遠ケレバ マ  
 ダフミ(文、踏)モ見ズ 天ノ橋立 小式部内侍  
 言葉が餘計に働くだけに、理窟に陥り易く、智の判断に待つやうになつて、一種の頓智を弄するものになり了ることが珍らしくない。  
 もしこれも序歌や枕詞のやうに用ゐるとが出来れば、面白からうと思はれるけれども、それは到底出来ないとである、働あればあるだけ句柄より調まで下品になるものである。



第三編 短歌の研究

六十六

既に作られたるものゝ研究

ヒサカタノ 天ユク月ヲ 綱ニサシ 吾が大君ハ

蓋ニセリ

柿本人麿

由來我國一般の人士が『美』を認識するのに何時も優美といふ『美』の一部分の感じしかなかつた。歌は優美なものである。繪は優美なものである、琴は優美なものである。それだけの觀察のみであつたけれども、何時までもこの間違つた考を持續して居ることは出來ない。今若し歌は優美なものであるといふ考を持つて居る人があるならば、夫れこそ物笑ひの種だ。然らば歌は優美でないかといふに

決してさうではない。或ものは優美である、優美のみしかないと思ふのが間違ひである。この人麿の作歌を誦するものはどんな感じが起るであらう。超忽として雲外に逍遙するやうな感じがするであらう。これは決して優美ではない。崇高な感じである。後世優美といふ定規を以てすべての文學美術を見て其他を顧みなかつたので勢文學美術は優美といふことにばかり歩を進めて短歌としても壯嚴なものや、霸氣あるものは見ることの出來ないやうに成つたが、萬葉時代にはそんな風はまだなかつたものと見えて雄大なもの閑雅なもの滑稽なもの等種々な方面に『美』を發揮して居る。中でも人麿の短歌は簡潔で一字一語も動かすことが出來ないで雄大の氣が満々て居る。この作

六十七



なども其一例である。  
 久方は久堅の義であるといふ説と、日指方の義であるといふ説と、匏形であるといふ三つの説があるが、日指方が穩當な説であらうと思う。これは天といふ語の枕詞である。  
 蓋は唐朝から渡つたもので今僧侶が冠るやうなもの九いのであらう、儀制令に蓋皇太子紫表蘇方裏頂及四角覆錦垂總親王紫大纈云々と出て居て古くから四角のものがあつたらしいが周禮に爲蓋象天などあるから以前は丸かつたものであらう、その蓋は左右に綱を付けて侍臣がひかへもて歩まれたもので、神々しき皇子のことであるから、大空をゆく月に綱を付けて蓋にして居らるゝといふ、誇張の修辭を用ゐたのであらう、皇太子や皇子をば大王オホキミといつた時

代があつたので、今の陛下を大君といふの、とは違つて居る。「お月さまが傘を御召しになつた」といふやうな語があるので月と蓋といふものの譬喩が耳ざはりに聞えない。この邊の作者の苦心は思ふべきものがあらうと思はれる。同じ人麿の作で雄大な趣味を持つて居るものは

大君ハ 神ニシマセバ 天雲ノ イカシ雷ノ上ニ 廬イホリセ

ルカモ(天皇御遊雷岳之時)

天ノ海ニ 雲ノ波タチ 月ノ船 星ノ林ニ 漕ギ

隠ル見ユ(詠天)

山川モ 因リテツカフル 神ナガラ 瀧タキツ河内ニ

船出セスカモ(幸于吉野宮之時)

など其他にもあるであらう。



我國文學美術の欠点はこの雄大の趣味で、社會は喝望して居るから大に雄大の趣味ある創作を試みるのも快事であらう。

長ラフル 雪吹ク風ノ サムキ夜ニ 吾春ノ君ハ

獨リカヌラム

與謝女王

叙景的抒情もしくは抒情的叙景は短歌の極致である、單に景を叙するのみなれば短歌よりも俳句の方が更らに其味を得て居る、叙景の美は簡潔である、醜汚な點を掩ふて『美』な所のみをあらはすのにあるのである。白樂天の野火燒不盡、春風吹又生といふよりも劉長卿の春入燒痕青の方が一層カツキリとして居て何となく韻文的に感ぜられるのと

同じこととて十七字の簡勁に敵として短歌は叙景の上に力を角することは出來ない。けれども景を借りて情を顯はし情を借りて景をあらはすのは短歌の長所である。情景共に至つて景か情か分つべからざるに及んでは美しいふべからざるものがある。

昨日も今日も雪が降つて、降つた雪は凍つて、凍つた雪の上を寒い風が吹いて、家に居てさへ、身も切らるゝ許りに覺えるのに、旅に出て居らるゝ我夫は充分な夜具もなしに、獨り寢をして居らるゝことであらう、如何にも氣の毒に思はれる。と宿の妻の優しい心、が誠にと汲みとられるではないか。

叙景的抒情詩に屬すべきもので、この他



君待ツト 我戀ヒ居レバ 我宿ノ 簾ユルカシ

秋ノ風吹ク 額田女王

芦邊行ク 鴨ノ羽交ニ 霜フリテ 寒キユフベハ

大和シ思ホユ 志貴皇子

三吉野ノ 山ノ嵐ノ 寒ククニ ハタヤ今宵モ

我獨リ寐ム 文武天皇

情を以て景を叙するものは景を借りて情を陳ぶるものよ

りは其數が餘程すくない。

人ナラバ 母ガ最愛子ゾ 麻裳ヨシ 木ノ川ノベノ

妹ト春ノ山

妹ニユヒ 我越エユケバ 春ノ山ノ 妹ニ戀ヒズテ

アルガトモシサ

何處が情、何處が景と更らに分つべからざるまでに、融和せるものは多く單に抒情詩として居る。

言シゲミ 君ハ來マサズ 霍公鳥 ナレダニ來鳴ケ

朝戸ヒラカム 大伴四綱

二人ユケド ユキ過ギ難キ 秋山ヲ イカデカ君ガ

獨リ越エナム 大來皇女

是れ等は決して純粹の抒情ではないが、世間では單に抒情詩として居るのである。夫れはどちらでもいゝが、情を遺憾なく發揮せしめる手段として景を借り用ゐるといふことは最も必要なことである。

苦シクモ 降り來ル雨カ 三輪ガ崎 佐野ノ渡ニ



是れ真情の流露にして偽らず飾らざる所に、讀者をして主  
肯せしめるものがある、後人藤原の定家が翻案して

駒トメテ 袖フチハラフ 陰モナシ 佐野ノ渡ノ

雪ノ夕暮

といふ歌を作つた、もとよりこれは完全な意味に於ていふ  
所の、創作ではないけれども選ばれて新古今集に出て居る。  
單に短歌が優美といふ一點のみを以て満足しなればな  
らぬものなれば奥麻呂の吟詠は定家の翻案の絢爛に下る  
と數等である。けれども短歌は優美を以て唯一の標準と  
して立つ所のものでない。定家の翻案は只絢爛である、奥  
麻呂の真情を見ることは出来ない。言葉の上に於て縁を

求め巧を盡して居る、奥麻呂の餘情はない。即ち絢爛に走  
つて眞を忘れたものである。本居宣長いふ。

苦しくもふり來るといへると、家もあらなくにといへる  
とを、袖うちにはらふかげもなしとよみなされたる、一きは  
つよく、意もせちなり、其上夕暮とあれば、まして宿かるべ  
き家のなき意、詞の外にあり、

と、果して然るか、否々大に誤れり。袖うち拂ふかげもなし、  
といふと苦しくもふり來る雨かといふ詞と何れの情が切  
てあらう、駒とめてなどいふノンキナ遣り方は其處に幾ら  
かの猶豫がある、苦しくもふり來る、其處にすこしの猶豫が  
ない。定家の作の調のストラリツとして居るのは、奥麻呂の  
間髪を入れずといふやうな詞つきには及ぶべきこととな



嗤大神朝臣奥守歌(萬葉集第十六卷)

寺々ノ 女餓鬼申サク 大神ノ 男餓鬼タバリテ

其子生マハム 池田朝臣

報嗤歌

佛ツクル 眞朱足ラズバ 水タマル 池田ノ朝臣ガ

鼻ノ上ヲ穿レ 大神奥守

大神奥守、牀驅みすぼらしく瘦せて居たので池田の朝臣が嘲弄したものである。奥守もさるもの池田の朝臣が赤鼻を嗤つてこれに報じたものである。

他人を輕蔑し、誹訪し、嫉妬し、若くば嚇怒の感情、又は貪慾恐

怖利害得失の感情は惡感であるから歌に詠まれぬといふ論者が近頃あるが、決してさうでない。これ等の感情が理窟の上でなくて只單に感情であるならば、立派に歌にあらはすことが出来る。歌にあらはされぬといふやうな惡感ではない。池田朝臣、奥守の作などは輕蔑誹謗ではあるけれども讀者は必ずしも惡い感じを起さないであらう。

ミヅノシ 久米ノ子等ガ 垣ノ内ニ 植ユシハ  
ツカミ 口ヒビク 我ハ忘レヨ 討チテシヤマム

これは 神武天皇東征の御時の御製作歌で嚇怒の意を漏らし給へるものであるけれども、決して惡い感じてない。これを誦すれば千載の下猶惰夫をして立たしめるの概がある。理窟の上でなくして感情でありさへすれば決して



悪くはない。それが理窟の方面に些でもかゝつては感じの上に立つ歌とすることは出来ないのである。

霞立ち 木ノ芽モハルノ 雪フレバ 花ナキ里モ  
花ゾチリケル 紀貫之

是れが單に序歌であるなれば、三の句以下に於いて三の句以上を有意味なり、無意味なりに生かして用ゐねばならぬに、これでは全く一の句と二の句の前半は無用の長物であるのみならず、骨子ともいふべき四五の句は立派な理窟であつて感情の上からいつたものでない。春の雪降れば花なき里に花が散る。三角形の内角の和は二直角に等し共に是れ理窟の甚しきものである。文學は理窟——即ち智識

の判断を要するものをば、否認するのである。理窟らしくともそれが感情的のものであればこれを短歌としていひあらはしてもそれが美と認めらるれば善いけれども、如何に立派な辭句を用ゐ高調に出來上つて居ても、智の判断を要求するが如き理窟的のものは文學としての短歌の價値は零である。同じ貫之の作に

三輪山ヲ シカモカクスカ 春霞 人ニ知ラレヌ  
花ヤ咲クラム  
櫻花 チリヌル風ノ ナゴリニハ 水ナキ空ニ  
浪ゾタチケル

前半は確かに物になつて居ながら、後半の理窟で以てすべてをメチャクにしてしまつて居る。貫之は醍醐の朝に



躬恒等と共に古今集を選んだ人て昔から人々の崇拜して居る歌仙である。歌仙にしてこの通りである以上は、その流を汲み其教を奉ずる者の、作物に文學として論ずべきものの殆ど無いのも強て無理なことではない。『古今集』の欠点は即ち古今として特調ある作に文學として見るべき物がなくて徒に駄洒落と理窟といひかけと謎とを以て満たされて居ることである。

澤ニ生フル 若菜ナラネド 徒ニ 年ヲツムニモ  
袖ハヌレケリ 藤原俊成

歌學に精通して居らるゝ先輩佐々木先生に聞くに俊成定家の作は其當時に在つても其趣味を捕捉することが出来

なかつたものと見える、其定家が家の集を時の人が達磨集といつたとのことである。現にこの歌に就いて見ても四の句は解すべからざる語ではあるまいか、世のものしり達種々の解釋を加へるけれども、すべて智力で解したもので感情若しくは趣味の上から説いたものがない。徒に幽玄を銜ふて、常識を以て解すべからざる語句を連ねて得たりとし、作家の能事盡せりと思つた俊成定家は、尙恕すべきも、滔々たる世の學者強ひてシツタカ振りをして、これを曲解するに至つては其心事更らに憫むべき所のものであるではないか。總じて『新古今』時代は言語の絢爛を以て唯一の標的としたがために『古今』よりも更らに言語に重きを置いた。言語は感想を表現するための道具であつて、感想が



主である、主なる感想よりも、これを現はすべき言語に重きを置いては短歌の發達すべき謂いはれがない。其本を捨て、枝葉に就くものである。是れ等が延いて後世歌界を賊したのである。今猶一二の例をあぐれば、

又モ見ム　タカ野ノ御野ノ　櫻狩リ　花ノ雪散ル  
春ノアケボノ　俊　成  
櫻色ノ庭ノ春風　跡モナシ　トハハゾ人ノ雪  
トダニ見ム　定　家

の如きものである、更らに繰り返していふ。言語は感想を表現するため用ゐる道具であつて、感想は主で言語は末である。言語の麗はしからむことを望んで感想を忘れるやうでは創作本來の目的を忘れたのと同じことである。

山ハサケ　海ハ淺セナム　世ナリトモ　君ニ二心  
吾アラメマモ　源　實　朝

實朝は頼朝の子である。征夷大將軍として、鎌倉に立ち天下に號令せんとせしも、外戚北條氏在つて意を振ふ能はず。遂には銀杏樹下刺客の手に仆るゝの悲命に終つた人で、政事的方面に於ては常に暗愚庸劣の人として傳つて居る、けれども、一度文學上の鎌倉右大臣源實朝を見る時は決して暗愚庸劣でない、唯に暗愚庸劣でないのみならず萬葉以後近世に至るまでの唯一人の偉人である。大空の聳峯裂けて其跡なく、萬斛の碧海埋つて平地となるも、至尊に對し二心を持つ如き吾實朝に非ず陛下幸に震襟を惱まし給ふ



こと勿れとの意、雄壯の調と共に大に見るべきものがある。實朝の遺著金槐集三卷は實に我國文壇の珍である。今其よしと思ふもの二三を拾録しておかう

雁鳴キテ 秋風寒ク ナリニケリ 獨リヤ寐ナム

夜ノ衣ウスシ

物言ハヌ 四方ノ獸オダモシ スラダニモ 哀レナル哉ヤ

親ノ子ヲ思フ

時ニヨリ スグレバ民ノ 歎キナリ 八大龍王ダイヨロウ

雨ヤメタマヘ

武夫ノ 矢並ツクラフ 小手ノ上ニ 霞タ走ル

那須ノ篠原

吹ク風ノ 涼シクモアルカ 自ラ 山ノ蟬鳴セミナキテ

秋ハ來ニケリ

この『涼しくもあるか』は疑問でなくて『涼しくあるかも』と同じことで歎辭である。このことは誤る人もあるから特に記して置く。實朝は雄大の作があると共に叙景に於ても『吹く風』の吟の如く秀れたるものがあるといふことも注意せねばならぬことである。

ヲツクバモ 遠ツ足尾モ 霞ムナリ 根越シ山越シ

春ヤ來ヌラム

賀茂真淵

賀茂真淵は盛んに古文辭の研究を唱へ國家主義を宣べた偉人である。この偉人は實朝の名の隠れたるを起してこれを稱揚し萬葉を宗としたけれども其作物に至つては未



だ必ずしも偉人でない。この歌は其家の集の劈頭にあるもので稍見るべき節がないではない、けれども實朝が

今朝見レバ 山モ霞ミテ 久方ノ 天ノ原ヨリ

春ハ來ニケリ

には及ばぬ。眞淵は國文學上の偉人であるけれども詩人としては賛辭を呈し難い方である、時に理窟に入り駄洒落に陥つたことは此人にしてすら免れ得なかつたのである。集中に見るべき物は無論あることはあるのである。

ミ冬ツキ 春立チケラシ 久方ノ 日高見ノ國ニ

霞棚引ク

天ツ罪 ハラフタハ 雲井吹ク 風モ涼シク

ナリニケルカモ

サヅ浪ノ 比良ノ大和田 秋タケテ 淀メル淀ニ

月ゾスミケル

信濃ナル 菅ノ荒野ヲ 飛ブ鶯ノ 翅モタワニ

吹ク嵐カナ

皆是れ一世の秀吟である。

鶯ノ コエスル野邊ニ 立ツモノハ ワレト朝アシタノ

霞ナリケリ 香川景樹

眞淵が萬葉を唱へたのに反して『古今』を宗として立つたのは香川景樹である、景樹は眞實を調ぶるといふことを以て短歌の目的とした、それは彼れが手腕とは伴はなかつた、實に物の眞を表はす、眞即ち善、善即ち美である以上はそれを



以て短歌の能事とするも一理あることである、が惜しむべきことには景樹は才あまりあつて創作の資に乏しき所があつた、才子肌の人であつて忠實なる作家の方の人でなかつた。彼れが家の集修むる處の歌數十百首は古今集以來の駄洒落と理窟いひかけの外に出づるものは實に僅かである、陳腐なるものも甚だ鮮くない、平凡なるもの即ち創作として餘りに薄弱なものは其數數ふべからざる程である。前掲の歌なども其好適例である。

鶯ノ アカツキ起キノ 初聲ニ 今ハトシラム  
春ノ夜ノ月 餘リニモ 春ノ日影ノ 長ケレバ 暮ルルモ待テ  
月ハ出ニケリ

擧げて一々に指摘せずともであらう

追ヒ及キテ 取り返へスベキ 物ナラバ 黄泉平阪  
道ハナクトモ

景樹其愛兒の死を悲しんで作れるもの、集中吾はこの一首を取るのみである。

打エミテ 膝ニハヒヨル 悲シサハ 我子人ノ子  
カハラザリケリ 高崎正風

先輩の作物を是非することは先輩を是非することでない。作物を論ずるに當つては先輩も後輩も眼中に在つては大變である。公平に世にあらはれたる創作に就て月且を試みることを以て直ちに傲慢といひ禮讓をしらぬといふの



は、いふ其人の胸中を笑はねばならぬ。高崎正風氏は陛下の御親任を忝うして居るのみならず御歌所長として天下を風靡して居る、其人の作物を乳臭兒輩が是非するのは餘りに量見違いてないかとは、しばしば吾人の聞く處であるが、これは清き文學美術の上に強いて人爵を加へて威嚇さんとするものである。正何位勳何等は文學上には些の効能もないのである。國家の元勳は元勳として吾人は何處何處までも尊敬を拂はねばならぬけれども、一度それが文學美術の上に及んでは天下文藝のため其是非を論ずべきは吾等筆を執る者の任務である。

高崎氏は八田知紀翁の門にいてかねて香川景樹を崇拜し『古今』を宗として居られるので『古今』以後の長所短所共にこ

れを現世に保持せられて居る。近來吟咏せらるゝ所の數百首はよく桂園一派の短所を現はして居るが、氏が少壯有爲の時には、さすがにこの派の妙味を解すべき作物もあつたのである。

タラチネ、ノ 親ニムカヒテ イヒ難キ 心ハ曾テ

ナカリシモノヲ

我妹子ガ 心ゾシシノ 綿入レテ 風ノフキトホス

冬ハ來ニケリ

などは千載の名吟であつてまた高崎氏一世の秀吟であることは今更辨ずるまでもない。たゞ世の青年が肩書の仰山なを喜んで其作物の眞價を見るの明をかいではならぬから特にいふのである。



荒熊モ アヤブミ渡ル 岩ガ根ヲ ユスリテ落ツル

石狩ノ瀧

小出 粲翁

小出翁は異才の士である、翁の長所は前掲の如き雄大な物にあるのではない。翁の長所は断えんとして續き續かんとして止まるが如き音韻の美を恣にせられて居るのにあるのである。

今來ント イヒテ歸リシ 後手ノ タゞ目ノ前ニ

見エ渡ルカナ(水上老人悼亡)

我タメニ 水汲ム妹ガ 朝カゲノ 瘦セタル姿

見レバ悲シモ(妻病)

趣向は軽い、たゞ真情の流露である、故に調の上にいふべからざる妙味がある。世の人が翁の長所をよく卑近の物を

取つて歌を作りしかも卑近でないのをいふが、これは翁の短所である、憇じかこの長所があるために翁が真情をうたへる物を多く見ることが出来ないのである。老人であつて些でも趣向ある作物、これを換言すれば創作として有意義なるものを絶えず公にして居らるゝのはたゞ古稀の小出翁あるのみである。

湯ノ中ニ 足サシノベテ 老人ノ 病モシバシ

忘レガホナル

佐々木信綱氏

新しい趣向を以て歌を作らねばならぬといふことを明治時代になつていひ出したのは佐々木信綱氏である、先人弘綱翁博學の後を享けて『歌學全書』を刊行し續いて『續歌學全



書』を公にせられ、後進子弟のために劃策せられたことは多々である。現に教を氏に請ふて十年の不審忽ち晴れるといふやうな有り難い事に常に遭遇して居るので、氏が作物に就ても吾人がいはんとせる所は既に『新思潮』並に氏及び氏の門下の俊才と予等二三の者によつて成る雑誌『この華』誌上に於て教を乞ふて高説を得たこともしばくである。病中の老人が湯治の安樂な様を寫して其妙を極めたるものは前掲の作である。氏が長所並に短所は今遽に判ずべからざるものがある。近々氏が歌集は上梓されるであらうから其著を見ての後に吾等が思ふことを陳べても未だ遅いといふこともあるまいと思う。今は氏が近詠中より其特調ともおぼしきもの二三を掲げておかう

チサナキハ 幼キドチノ 物語 葡萄ノカゲニ

月カタブキヌ

漂ヒシ 沖ノ七夜ノ モノガタリ 酒ツク妻ガ

面ヤツレタリ

十マデハ 數ヘシ白帆 數ヘアキテ 礎ニ伏シツ、

歌ヲシゾ思フ

眞菰ガクレ ヌク舟一ツ 又一ツ 五月雨クラシ

十六ノ島(潮來雜誌)

クレナヰノ 二尺ノヒタル 薔薇ノ芽ノ 針柔カニ

春雨ゾフル 竹の里人

噫吾師竹の里人正岡先生予は今この一語の外未だ何事を



もいひ能はぬのである。この十二月二十七日は先生没後百日の法要を營まんとして居るのである。先生が短歌に就いて吾人に教へられたことは一つにして足らぬ。先生は日本文學在つて以來の傑物である。短歌に叙景を鼓吹せられたのは先生である、盛に漢語を入れて諧調を得るところを教へられたのも先生である。古今の卑むべきを教へられたのも先生である、しかも今茲に敢て先生が作品に向つて品騰を加へず、其論の如何をいはないといふのは予が薄識短才なるのみでなく、涙未だ盡きざるがために、多く公平を缺ぐの恐れがあるからである。今同門の士と共に先生が遺稿『竹の里歌』の編纂に従事して居ることであるから、いづれ刊なるの日世の評家の言もあることであらうから

先生が病牀に在つて春光を送られたる時の作十首をかゝりてこの篇を終ることゝしやう。

佐保神ノ 別レカナシモ 來ム春ニ 再ヒアハム

我ナラナクニ

イチハツノ 花咲キイデ、 我目ニハ 今年計リノ

春クレントス

病ムワレヲ 慰メ顔ニ ヒラキタル 牡丹ノ花ヲ

見レバカナシモ

世ノ中ハ 常ナキモノト 我愛ヅル 山吹ノ花

チリニケルカモ

別レユク 春ノカタミト 藤波ノ ハナノ長房

畫ニカケルカモ



クレナ井ノ 薔薇フ、ミヌ 我病 イヤマサルベキ  
 時ノシルシニ  
 薩摩下駄 足ニトリハキ 枕ツキテ 萩ノ芽摘ミシ  
 昔オモホユ  
 若松ノ 芽立チノミドリ 長キ日ヲ 夕カタマケテ  
 熱イデニケリ  
 イタヅキノ イユル日シラニ サ庭ベニ 秋草花ノ  
 種ヲ蒔カシム

第四編 結論

既に第一編に於て短歌の何なるかを論じ、運命如何を説き  
 第二編以下句を論じ修飾を説き既に作られたる作物を解  
 釋し善惡如何をもいふた。是れ等に據つて最早如何にし  
 て製作すべきかといふことも略解し得られたことであら  
 うと思ふが猶結論としてすこしくいふて置きたいと思ふ。  
 一首の歌を作製するには、一首の趣向がなくてはならぬ。  
 陳腐は趣向でない。平常ありふれて居る事柄は其まんなま  
 では一首の趣向にならない。僅かに三十一音を以て苟カウシムに  
 も創作といつて居る以上は、そこに何等かの創意がなくて



はならぬ。これ實に作歌の第一要義である。趣向には理窟を避けなければならぬ。一般の文學美術は智力の下に立つものでない。意力の發展でもない。感情より生じて來るものである。理窟は智識の判断を待つもので感情的でない。即ち理窟は歌にあらはすべからざる思想である。

月見レバ 千々ニモノコソ 悲シケレ 我身一ツノ  
秋ニハアラネド 大江千里

これは理窟である、感情を以て解すことの出來ないものである。既に感じを以て解することが出來ない以上はいくら短歌の形式を具へて居つても短歌といふことは出來ない。白髪三千丈と李白はいつたが三千丈の白髪は見たこ

とがない。それは嘘であつて面白くないといふ人があつたならば、夫れは其人が理窟一遍の人で感情を解しないのである。只感情からゆくのであるからして非常に長いといふことをあらはさんがために、誇大にいつたものである。これ等は理窟にあはないで、感情にあつて居るのである。松が縁りて色かへぬのが目出度いだの、雪を凌いで咲いた梅が勇ましい位では、一首を作製することは出來ぬ、これは餘りにありふれて居て且つ陳腐である、今少しく色彩と技巧を要するのである。趣向として、陳腐でなく、日常ありふれたことでもなく、素より理窟がなければそれは趣向として成立つて居るものである。

第二要義は用語である。散文と韻文とは自ら用語の異なる



るものがある。普通散文にて今日こんにちかもなどいふ歎辭を用ゐるものはないけれども短歌や長歌では盛んに用ゐて居る。其他に於ても韻文には多く古代の言語を用ゐる。これに就いては曾つて論じたことがあつたが今其大要をかいつまんでいふて見やう。

一、古語古體は多くの人の耳目に慣れて居ないので、その言葉からひき起す聯想とは、高尚優雅(些か語弊があるけれども)を主とする詩歌の本旨にかなひ、長篇では、ともすると散文的となる弊を避け得て、美を謳歌するに縦横自在、しかも活氣があつて言詞の品位を保ち得易い。これを近體及び現代語に望むことは出来難い。

一、散文は實用達意を本旨として居て美を謳歌する者で

ない故に何處までも通俗を主として、古語古體をしりぞけねばならぬ、詩歌はこれと反對である。

一、試みに古語は何が故に廢れたるかを思へ。これ非實用的であるがためである、社會の事物繁雜を極めれば極める程、實用的で明晰な散文的の露骨なもの方が適切を感じ勢、理窟ツボイ語の生出を促し、詩的で實務に迂遠な語は、生存競争に敗北し年を経て古語と呼ばれ死語あつかひを受けるやうになつたものではあるまいか。

用語が古いために蠢動して居る人間以外の面白味即ち昇天したかの感あらしめるので、詩には最も適して居る西郷南州が今生きて居たならば、多少否難を受けるであらうけ



れども世人がまだ左程に知らない内に死んだ、死んだがために今生き残つて居る元老のやうに多くの短所は顯れずして善い所のみが見えるオボロケであるからである。それと同じことで古語はまた吾々をして神代の清き美しくしき時代を聯想せしめるやうな感じがする。

語と語との接續によつて調を生ずるので調子は人各々獨特の調子がある、それは丁度對話をして、各自に音調の異なる如くに異つた音調を持つて居るので、これは各人々其研究の結果好む所に向つて然るべきである。

調子は歌の品位に關するから、よろしく滑聲の歌は滑聲の調子にやる。すべて内容如何によつて調子にも浮いた調子しまつた調子など色々用ゐなければならぬとである。

只タルンダ調子のみは最も注意しを避けるやうにしなければならぬ。

タルムのは助辭の多いのが原因となる。

例<sup>タルン</sup>アレバ 眺メハソレト 知リ乍ラ 覺東ナキハ  
心ナリケリ 新 古 今

内容の如何はともかく、調子のタルンで居ることは一讀して知られるであらう。あれば、それと、ながら、なり、けり、などの語を餘りに用ひ過ぎたためである。助辭、助動詞、接讀詞、副詞などは常に多く用ゐざる方が調子としてはタルマな<sup>い</sup>。そのかはり之れを餘りに省略する時は難解の作となつて讀者に何等の感興をも與へぬこととなる、この邊は作者の最も慎むべき所である。



三十一音の調子でさへあれば三十音でも三十二音でも三十三音でもそれは一向かまはないことである。

イノチヲ 幸クアラムト 石走ル 垂水ノ水ヲ

掬ヒテノミツ

三十音であるけれども短歌といへないことはあるまい。

ミ民ヲレ イケルシルシアリ 天地ノ サカユル

時ニ アヘラク思ヘバ

三十三音であるけれども吟誦しては三十一音の調子である、既に調子が三十一音であれば同じく短歌といへないことはあるまい。況んや莊重の趣きは字餘りから得らるゝことが間々あるに於ては一体としてこれを保存して置く必要もあるのである。

内容が趣向として餘りに薄弱な場合には趣向の方面をかへて専ら音調の上に技巧を加へるといふことも一法であらう、この時は一首の趣向が音調に重きを於いて居て、其内容は第二となるのである。即ち一首の趣向は調子にあるのである。

内容にも音調にも創意の籠らざるものは無趣向であつて其形式はいかやうに調つて居やうともそれは創作でない。四海波が諍かてめでたいといふことを

四方ノ海 波ヲサマリテ 君が代ヲ 千代ト歌ハヌ

民ヲカリケリ

といつた處でこれは一首の歌を作したとはいへない。内容の趣向として見るべきものは素よりなく、音調にしても



たゞ單に五七五七七の句のあつまつたばかりで此歌の特  
徴といふことは出来ない即ち無趣向である。故にこれは  
形式は短歌の形式を持つて居るけれども創意ある短歌で  
ない。完全なる意味に於ていふ所の短歌でない。  
歌を作るには寫生即ち叙景よりしても抒情よりしてもど  
ちらから這入つてもいゝが、まづ其以前に文學として價値  
ある古人の作例を讀まねばならぬ。  
既に之を讀む時は短歌の音調なり、いひあらはし方なりは  
自然に明瞭となることであらうと思ふ。今茲で千百字を  
用ゐて説くよりも實地にこれを研究する方が早く且つ能  
くわかるであらうと思ふ。

## 第五編 補遺

### 短歌會論難記

(一)

三月九日上野山上に例會を開く、會する者左千夫、藪房子、麓、  
潮音、藤真、芳雨、秋水、三郎、作歌の品騰に先ち芳雨が作ら係る  
人麿像の批評を試む。立像座像の二躰也。  
麓、私の考へでは、麿はこんなによさしな方でなかつたて  
あらうと思ひます、第一、位の低い武人であつて其時代で  
は歌人として待遇された人でないらしいです、人麿の像  
がおほく老人であるのは、栗田兼房といふ人がある夜の



夢に幹がないて梅の花ばかり雪のやうにちつて、かうばしいわきに直衣にうす色の指貫、紅の下の袴に烏帽子をかぶつた凡人でない老人が左の手に紙をもち、右に筆をもつて物を考へてゐる様子である、不思議に思つて誰かときくと年頃人麿を心にかけるゝ志深さに形を見せるといつてかき消えた、その夢のあとで繪かきにたびたびかきなほさせて持つて居たが後に白河院に奉つたさうである。こんな話があつて土佐繪で見る像は脇卓にゆりかかつたりして筆や紙を持つて居るのがおほい。今度のこの像もありふれてはるまいか。頓阿が作つたといふ像もあぐらをかいてゐて右の片膝をすこしあげてゐた、顔はあをのいで歌でも考へてゐるら

しく頬のとなぞはよく出来てたと思つた。手には何にも持つてゐない。この像も座つてゐるのだから参考したらよいでせう。

葯

房子

この目のつけ方がいかにもパツとして居る何か中間に鳥の飛んでゐるのをでも見てゐるかの様で實にボンヤリとして居る、よし目を上向きにしても顔だけはさう仰向くことは實際に於てもない、このやうに仰向きになつては他に鳥とか蝶とかいなくてはさかしく従つて像そのものが主觀的にあらはれない。口のあけかけになつてゐる處などは如何にも呆然としてゐる、首と肩との工合なども他から持つて來てくつつけた様だ、立像の方はどうしても婆々で男性とは見えな。僕は立像とする



と普通寒山拾得之圖などのやうに首をすこしく前に傾け腰をイグラかかゞめたのなどが調和するのであらう、アレなどは餘程考へたものと思う。

左千夫 一体この像は眺めてる處か考へてる處かボンヤリして居て分らない、ボンヤリさした積りだつてそれぢや仕様がな、義郎君もこの間いつたが今の製作は美術文學すべて趣向なしだから困る、この像も何等の趣向もないぢやないか。話しがすこし横入りするけれどもこの間人が華山の幅を持つて來たが牝鶏が一羽かいてある、元來普通のゑかきならば牝鶏只一羽はかゝない、よしかいても駄目だが、華山はさすがえらいもので、ろの牝鶏一羽でチャンと趣向が立つて居てもものになつてる。ど

ういふ工合かといふと足を、風にしてむかうをむいてるのがこちらに振向いてる處でアツた、一羽の鶏の様子に趣向がある、人麿の像に趣向がないとは根本に於て僕と意見を異にしてる。

潮音 人麿を歌の神としたのと、萬葉の歌人人麿としたのと二種ある、像を作るとしてもこのどちらかによらねばならぬが、この人麿は神格がない、勿体ぶつた處はすこしも見えぬ。人としての像を作るならばむしろ人麿のある歌によつてやつた方がよくまとまりはしないかしらん。議論百出否難につぐに否難を以てし、或は其相貌を想像し心事を推し骨格たくまじきものとするもあれば感情の鋭敏なりし人となすもありて歸着する所をしらず遂にある



歌によつて位置を明かにし今すこし年若く、有意味の姿勢  
(即ち趣向ある)形に改作し更に批評會を開くことに決し作  
歌批評に移る。

わが背子が袖つけごろも 白妙に にほひよる

しき 桃の花かけ 秋 水

左千夫 どうにか歌になつてゐる。 蕨眞 袖つけ衣はへん

てす。 秋水 袖つけ衣は晴の衣で、官人の袖付衣とふる

くからあると思ふ。 蒔房子 詞のつゞき工合が白妙の袖

付衣といふべき所と思ふ。

よしのがは 鮎子さばしる 清き瀬の 細網さす

岸に 桃の花散る 秋 水

義郎 吉野川が下の數句に對して如何にも不自然だ、僕は

桃の花の感じはなくて山吹らしく感ずる。 蒔房子 鮎子

さばしるはどうか、子鮎といふ所ぢやないかしらん。 左

千夫 鮎子さ走る清き瀬といふ詞が萬葉にあるのでその

儘用ゐたのだ。 義郎 鮎子さ走るといふと早瀬で桃の花

ちるといふ感じはゆるやかな流れのやうだ。 麓 どうも

さういふ感じがありますね。 秋水 山吹ではふるくさい。

義郎附記 サバシルキヨキセノササスキシ 佐行加行の

音が甚だ多くして調をなさない。

羽採女が 棧の音もゆらに 御衣おらす 機屋の

齋處 桃の花散る 秋 水

麓 棧の音もゆらにはをかしい。 蒔房子 ゆらにといふ

のは形のあるものを形容する言葉でせう。 蕨眞 そちら



しく思はれます足玉も手玉もゆらにといふ様にゆく言葉  
でせう。左千夫 御衣といふのはイヤだ。

麓 機屋の齋庭もをかしい。

左千夫又いふ、「梭のともゆらに」は「ひのともさやに」の思ひ違  
ひであらう、そう直してもよき歌にはならぬ。

わかぐさの 新妻もてる 布教師が 庭にさきたる

源平桃のはな

芳 雨

左千夫 一二の句は布教師の説明にすぎない、かういふ様  
な句は成べく用ゐたくない、只布教師の庭に源平桃がさい  
てる處をいへばいい。

麓 若艸の新妻とつゞくのは……義郎 僕は桃のナマメ  
カシイ處と布教をする妻帯坊主とが何處の邊にだか調和

してるやうに思う、併し善い歌といふではない、よしものに  
なつてるとしてもゲヒタ歌には違いない。左千夫 桃の  
花と妻帯坊主と調和しても此歌にては其新妻も坊主も客  
觀的に顯はれてゐないからいけぬのだ。

牛の子の 群れてあそべる 廣庭の 吹井のほとり

八重桃の咲く

芳 雨

潮音 四の句はなくったっていい。義郎 ろこが作者の  
趣向なのだらう。潮音 四の句のない方がいい。左千夫  
廣庭といふのがわるい牛の遊んで居る庭に吹井があると  
いへば澤山で廣庭といふ詞は殊更な感じがする併し境は  
えてゐる、

いぬ鳥の さとびの 聲もきこえつゝ 桃の花原



左 千 夫

見えにけるかも  
 義郎 見えにける鴨といふよりも現在、見えてるなりにいつたらどうです。蒔房子この次の歌の『左保神のいます宮居が桃霞み五百重のおきに見えこし高樓』なども現在にある方が感じが強くてよくあらはれると思う。左千夫 僕のこの十首は武陵桃源といふものを脳中にゑがいて其處にわけ入る心持ちを以て連作を試みたのである。蒔房子 題詠の歌のやうで少しも作者自身で桃林にわけ入るやうに感じない。義郎 見えて来たといふよりも見ゆると直叙法を用ゐた方が確かにいゝ。左千夫 けるかもといふ語を皆、無造作に使うが僕は家持の撫子の花さきにけるかもが一番有意味に使

つてると思うのでこのけるかも、自分では些か考案をめぐらした積りだ。潮音 僕は見えにけるかもはこの通りでいゝと思う。

左千夫附記、見えてきたといふのと、見ゆるといふのと何程の差があらふか、余りこせついた評は難有ない。

しろがねの 真砂しくなす 河原べを そぐへも

しらに 桃の花咲く 左 千 夫

潮音 河原邊を……。(義郎曰ふこの間にそぐへ、の論大に盛んなりき) 潮音 そぐへもしらにといふのは『吉野山霞の奥はしらねども』といつた様なものです。左千夫 そりや違うサ、只際限もなくといふ語だ。義郎 河原邊をいふために三句を費してゐるが僕はよろしくこの三句を始め二句に



約め四五の二句を三句にいひたい。葯房子 同感主と  
なるべきそぐへもしらに桃の花さくが客に見えていかに  
も力が弱い。義郎 三句までは細かに形容して置いて突  
然そぐへもしらにといふ様な壯大なことを持つて來て甚  
だ面白くない。左千夫 始めを二句にするといふ説に賛成。

ゆく水の 絶ゆることなく 桃の花 千代か咲き  
散る とこ春の國 左千夫

麓 いゝ歌だと思ふ。義郎 桃が動きはしませぬか。葯  
房子『千代かささちる』のかが氣にくはない何も殊更に疑は  
ないで千代萬代に咲き散るといつた方がいゝと思ふ。麓  
蕨真 潮音 葯房子の説に賛す。

白桃に 緋桃に飛びて ながき日を 蜂鳴りめぐり

蜂まひあそぶ 左千夫

葯房子 一二の句が俗な感じがする。義郎 飛びて永き  
日をと續いてゐて緋桃にて一應切れるやうである、この飛  
びては四の句五の句にもかゝるので非常に強い語でなく  
てはならぬ様に思ふ、ツマリ二の句の句割れが面白くない。

左千夫 アン／＼ 蜂がうなツてる處の考へだ。潮音

桃の花がいかにもちいさい様に思はれる。葯が房子  
蜂のうなツてる處は春の永日とよく調和してる。

春の江の ながれの上に 水枝さし 朱のとばりと  
咲ける桃かも 左千夫

麓 潮音 感じのいゝ歌だ。義郎 流れの上に水枝さし朱  
の戸張といッてる處がすこしく明瞭をかいてる様に思は



れる。蒔房子。いきなり朱の戸張と出て居るのが如何にも突然である、女とか春の闇とか何か前にあるならばすこしも無理を感じないのだが頭から朱の戸張ときてるから朱の戸張が甚だ鈍い。

左千夫附記、諸君の評が悉く詞詮義で持切つてゐる、趣向の如何を問はず、歌境の趣味ありや否やを問はぬは、最も遺憾である、固より武陵桃源などと云ふは、夢想的の趣向である、漠然とした所を見て呉れんでは始めからだめなことは知れてゐる、寫實的筆法で土佐繪を論ずる様なものだ、余はくだらぬ寫實的の論よりか寧摸樣的の土佐繪を好むものである、寫實的の繪はだめだと云ふのではない、「朱けのとばり」と云ふのが突然だとは、予には更に分らぬ、

櫻ちる 木の下風は 寒からて 空に知られぬ  
雪ぞふりける

と云ふ様にちやんと縁語がなくばならぬと云ふ譯か、予はこんな風にキョウにこしらえた歌は大嫌だ、朱のとばりと云ふ様な語を用ゐるには何か是れに縁ある場合でなければいかぬなど云ふのは、それは古今集以下の思想じやあるまいか、桃の花が白<sup>い</sup>ものに極つて居るに朱のとばりとやつたらそれは突然かも知れぬ、桃色と云へは薄紅色と極つてゐる今日、桃の花を朱のとばりと形容したのが何故に突然であらうか。縦令へば

飛ふ鳥の あすかの山の 櫻花 風にみだれて  
雪とちるかも



此雪とちるかもと云ふのも突然であらうか、予はこんな詞使を少しも無理とも突然とも思はぬ、調べも大事だ詞使も大事だ、さりとて小さな所をこせく磨きたて、許り居たては、のびくとした大きな歌は決してできるものでない、それから予は義郎君が

菅の根の 永き春日を 瑠璃玉の か青き水に

桃ちり流る

を除かれたのは少し遺憾である、『瑠璃玉のか青き』と云ふに就て色の感じかないとか、玉と云ふ丸い形の感じが強いとか云ふて、無造作にはねとばされたのが解せられぬ、『璞玉のとし』と云ふ枕詞の意義は如何である、此の『と』は『鋭』にて磨かぬ玉の角立つて鋭つて居る所から起つたのである、玉と云

へば丸い感じか起ると云ふは後世の思想であらう、殊に此歌の瑠璃玉は殆ど枕詞と見てもよいのだ、此を瑠璃色と直したら調がたるんで小細工に陥りはせまいか、こんなツマツマこまかい詮議に心を勞し大体の趣向及境の趣味と云ふ点に少しも注意して呉れぬとは、聊ならず不平であるのだ、吾歌がよいと云ふのではない、諸君の批評の仕方に就て考を異にしてゐる点を云ふのである。

春の野を たゝさ横さに めぐり行く 水のくま

桃咲ける見ゆ 格 堂

義郎 見ゆは贅。潮音 見ゆがなくばいと 思う。潮音

ちいさい流が蜘蛛の手に流れてる其隈々に桃がさいてるのサ。左千夫 たゝさ横さは格堂君のよく用ゐる語だ



が僕は同意まかねる。全体に此歌箱庭的だ。

青柳の しだりかつらに 折りそへて かざゝま

ほしき 桃の花かも 格 堂

左千夫 古い。義郎 萬葉の梅と柳をかざすといふのと

同趣向で新らしい趣向がなく桃といふ者も働いて居ない

真白帆の のぼり下りす 大川の なかつ洲根の

桃咲きにけり 格 堂

義郎 上り下りするとあるべき所である「す」では切れるが

切れる所ではない 併しいゝ歌だ。潮音 同意。左千夫

僕はとらぬ、真白帆の上り下りと云ふのは、どんな場合であ

らうか、風によつて進退する帆かけ舟が同じ時にのぼつた

り下つたりすることがあらうか、蒸汽船なら勿論であるが、

蒸汽船では此光景に調和しまい。

行き暮れて 桃のはやしに 宿れりし 佐保の河

原の 藁屋し思ほゆ 格 堂

蒔房子 行き暮れてといふ語が甚だ薄弱で四五の句より

見る時は行きくればたらしくおもはれない。義郎 宿つた

のが林だか河原だか藁屋だか直に感じに上らないで少し

ボンヤリしてる。

三千年の 桃さく頃を いとし子の 乳母なるひ

との 里さもりけり 義 郎

蒔房子 三千年は 麓 よくいふぢやありませんか。左千

夫 三ツ年として植ゑて三年目の桃といやうにした方が

いゝでせう、歌はよくない。蒔房子 同意



乳母戀ひて あ子泣きやめず 桃の木の 實のむ

すぶとも 來ぬ人なれば 義 郎

藟房子 すべてが乳母と連聯してゐて乳母を歸すに『桃の花實になるまでと子にいひて乳母をばやりつ乳はなすため』と云のが前にもあつたのでいゝ歌だと思ふ、只なきやめずとあつては五の句の來ぬ人なばに對して如何にも態とらしくきこえるこれはやまずとした方がいゝやうだ 蕨 眞いゝ歌ぢやと思ひます。左千夫 五句『こぬ人なれば』てはまとまらぬ、よい歌と云ふには賛同がてきぬ

桃の花 枝に手折りて 見すれども 乳に泣く子を なくさめかねつ 義 郎

蕨 子供には梅もふさはしくない櫻も無論いけない只桃

の花のみがよくかなつてると思ふその邊の消息がよくあらはれてるいゝ歌と思ひます。蕨 眞 左千夫 藟房子 共に同感

乙鳥 水に羽根すり もゝの花 さきてにほへる かはかみに飛ぶ 義 郎

義郎 これは連作外です。左千夫 目ツク所は確かに成功してるが羽根すりと飛ぶとがいかに隔つてるのは欠點だ。

ゆたくと 柳の糸を 針に貫き 縫ひて垂れけむ 桃のとばりか 節

義郎 ゆたくとがわからない其、他にたいした難もな くむしろいゝ方に思ふ。藟房子 前の左千夫君の戸張の



如く突飛でない。左千夫。ゆたくと云ふ語何のためか  
分らぬ、柳と云のもいらぬと思ふ只糸とありたい、兎に角つ  
まらん歌だ。

あまざかる 鄙少女等が 着る衣の うすいろ木  
綿と 桃咲きにけり 節

潮音 薄色キスとしたらどうかしらん、鄙少女だものとい  
ふものありさうかそれでは仕方がない、義郎まづくはな  
い、左千夫 よくはなす。

朝影に まひけむ鶴の いなだきの くれなる桃や  
妹に名かけむ 蕨 眞

名かけむに就て議論あり。蒔房子 桃といふことにはど  
うもすこしへんだ何か外のものにもッていつた方がいひ

でせう。左千夫 一二三までは非常に面白いが肝心な處  
で駄目にしてる。

桃の花 むくさく ゆふべ妹までば けぶりし雨の  
しみにも降る 蕨 眞

蒔房子 左千夫 煙りし雨のしみにもふるは壯大な景  
色であつてこゝにはどうもはまらないやうに思はれる。

竹村の ふる根をめぐり 行く水に うくくれな  
ゐは 桃のはなかも 潮 音

蒔房子 いゝであるが惜いことには四の句でこはして  
左千夫 景色もよくあらはれて新らしい趣向だ。蒔房子

四五の句がどうかかなりませんかね。  
わたし舟 よこたはりたる 岸の邊の 緋桃青柳



かげ水に在り

潮

音

左千夫 材料が多すぎて不自然である。蒔房子 緋桃か  
青柳かどちらか一つならばとも角も、青と緋とを並べた所  
などは人工を弄したものだ。

桃の花 くれなるひたす 河淀に さばしる鮎子

かげさやに見ゆ

潮

音

義郎 紅の桃の影がうつてをれば鮎子さ走るは見えまい  
と思うのにさやに見ゆとは矛盾ではなからうか。

二時頃より雨にて来るべき人にして來らざりしもありて  
豫期の如く論難攻撃甚だしからざりしは頗る遺憾なりし  
も大橋紆房子の來會によりいさゝか光彩を添へたり、九時  
終りを告げて散會。(義郎)

(二)

こぶしに似たるもくれん、もくれんに似たるこぶし、何れを  
いづれとわき難し。或人はいふ、もくれんには大木あり、こ  
ぶしは其の木小さしと、されど或人はいふ、吾等二たかへ  
もあるこぶしを知ると。又或人はいふもくれんは、すくく  
とのびたる枝の先に花咲けど、こぶしは節々まがりたる先  
に花ひらくといふ、もくれんは花大きく、こぶしは花小さし。  
或人はいふもくれんには紫の花あれどこぶしは白き花の  
みなりと、議論區々歸する處を知らぬ様なりしが、終に或人  
はいふもくれんは紫の花にて、同じ木ぶりに白き花の開く  
を、もくれんといひ。こぶしは花白くて其の枝を折とらば  
よきにほひするものなりといふ事に定まりぬ。 盧子庵の



俳句會にも、もくれんと辛夷花とのけぢめに就きて、議論ありきといふ其席上、うどんと蕎麥とあり不思議にも、もくれん黨はうどんを食ひ、辛夷黨はそばを食ひけるとぞ。うべうどんとそばは、もくれんと、こぶしに似たりけりと格堂語る。かゝる争の辛夷花の歌の會に會するもの七人。格堂、麓、潮音、興安嶺、蕨眞、及び芳雨と余なり、席上四點を得たるうた二首。

ウラ／＼ト 照ル日ノ影ニ 眞盛ノ ヨアシ花ユレ

春ノ風吹ク 麓

白妙ノ 八片反リサク 辛夷花 夕風マケテ

ハラ／＼ニ散ル 格 堂

上の句殊に辛夷花のさま見えてよければ撰びぬ、されど下句難あり、むしろ辛夷花の形容のみに止めて下句削るべし

といふ人あり。下句のよきが爲、とりたりといふ人あり。

二點のうた八首。

打畑ニ 春雨フレバ我庭ノ ヨアシノ花ハ チリ

スギニケリ 興 安 嶺

こぶしに限らず梅にても櫻にてもよし。あまり平凡なりといふ人あり、平凡なるが故にとりたりといふ人あり、こぶしと云事あるが爲一首のうたをして新らしくせりといふ人あり。二點ともに天に選ばれたるなり、次の二點とも天位に選ばれたるなり。

夕暮ノ 山ノイタトキ 輝星ノ 天降リツクナス

花サク辛夷 秀 眞

辛夷の花を星にたとふるはあまりに大業なりといふ人あ



り。カヤセヲは外國語なりやそれのみ面白ければとりたりといふ人あり、余こは實際に夕ぐれに見たるさまをよみたるなれば難をつくる人はつけよといふ。

辛夷花 妙ニテレレバ 花蜂モ エヨリガテカモ

菜ノハタニトブ 蕨 眞

根セリツム 田ノヘノ岡ノ 道ソバノ クヌキガ

ナカニ コブシ花サク 秀 眞

フル草ヲ ヤク野ノ原ノ 朝明ニ ツカサノコブ

シ ハナサキニケリ 麓

畑中ノ 神ノヤシロノ 椎ノモリ 入日サシソヒ

コブシサク見ユ 麓

椎の森といふと黒き感じがして辛夷花につりあはない様

に思ふと云ふ人あり。椎の森に入日がさしてゐる爲そんな感じは起らぬといふ人あり。

鶯ノ 來鳴キトヨモス 山アヒノ 一本辛夷 花

サカリナリ 麓

オクツキノ 辛夷ノ花ハ 玉テレド ナキ人モヘバ

トハニ見カネツ 蕨 眞

これは慕邊の辛夷花を連作にせる十首のうちなり。連作は一首づゝの各評には不利なりと云ふ者多し。されど二點のうたになりたるが妙ならずやと或人云ふ。

一点のうた十首

カキロヒノ 夕日ヲウケテ 反リ咲ケル 辛夷群花

チラマク惜シモ 格 堂



興安嶺の天位にとりたるなり。

唐人ノ住メル館ノ北陰ニチリカサナレル

コブシ白ハナ格堂

余が天位にとりたるなり。唐人の館と、辛夷花との、とりあはせに、ほれたるなり。

納屋ノ西馬屋ノ東桃ノ木トコブシ木ヅタヒ

ウクヒスノナク秀真

コモリタルオクツキ處ニシ日サシ辛夷ノハナ

ノ玉照ニサク巖真

ヲドロ鳴ル若雷ワカイルツチノアメハレニ虹タツユフヘ

コブシ花チル麓

腰ボソノスガル少女ガ朝ヨソヒムカフ鏡ニ

辛夷花ノカゲアリ

秀真

何だかおかしな歌だといふ人あり。この少女が唐美人ならばよからんといふ人あり。勿論支那美人の積と余は答ふ。巖真いふ、辛夷花と美人はいかにも釣合はない。美人が幽霊の様だといふ。辛夷は墓の様な處に多くあるものとして連作までする巖真君なれば、調和せぬの、幽霊美人だのと批難も起るなるべしとて、大笑となる。

白羽舞フ蝶ノ五百群玉ヌキニコブシノ花ト

オクツキニサク巖真

余もこれを探らうとしたれどおくつきにさくが、いやさにとらざりしなりといふ、一人二人賛成するものあり。白羽舞ふがへんだと格堂いふ、「白妙の」でもよからずやと余はい



ふ。余後より思ふに墓處なればころ白蝶と見たてたるもよからめと。

ハシキヤシ 妹が見メザル 白玉ノ 貝ツクリナス

辛夷花カモ

麓

白玉の貝つくりなすと形容したる處よしといふ人あり。

足引ノ 山ノタナリノ 花辛夷 イヤチリシクニ

ヘミ這ヒウツル

麓

蛇が這ひ出すとは不思議なり、蕨真君の墓の辛夷もあれば蛇も調和すべしなどひやかすものあり。

雨雲ノ 底ノ入日ニ 南フク 春ノユウグレ コ

グシハナチル

麓

麓高點なり。五月課題は鮎。會場は上野東照宮五重塔下

休憩所。今後毎月の會期は第三日曜日と變更す。會はてて人鷹像品評あり先月よりも人々の意にやゝ近づきたり、品評の後夜に入りて酒のみ笑ひ興じて居る時義郎來り話いよ／＼さかえて後散會。(ほつま)

(三)

鮎の歌會のびのびになつて到頭一月のびて、六月十四日雨のふりさふな午後より上野の例のたゞさへ鬱暗い矛杉の中で催した、會するもの僅に左千夫、蒔房、蕨真、秀真と予の五人、予歌を作らず刑の執行をうけて筆記をつとむ、茂春、席に出ずして歌を寄す、しかも賞にあづからず、呵々、

玉川ノ 夕瀬ヲ早ミ 月影ノ ヲドメル淀ニ鮎

サカノボル

蒔

房



蕨眞、秀眞 淀める淀はどうもをかしい、おちつかないやうな感じがする、元來よどいふのは瀬ヲ早ミなんていふ所

でなく水が静かに沈んで居る處の様に思う。  
結房 僕は決してさうは思はない、  
この歌三點にして選者皆これを取りしなり。

夏山ノ 青垣山ノ カゲヒタス 細谷川ニ 朝鮎

ツル子等 秀 眞

左千夫 青垣山は大にすぎて居るそしてすこしく遠い處にある感じがする、細谷川といへるのとも調和しない。蕨眞 私はすこしもさう感じませぬ。左千夫 僕は二の句を瑞枝青葉のとし細谷川を夕谷川としたらよいと思う。義郎 夕谷川とは固有名詞ですか。左千夫 何にさうぢ

やないのさ。義郎それでは朝鮎はつれまいて、左千夫、ア、さうか、一同哄笑。結房 結句に難がある。蕨眞 兎角この歌は机の上での想像の作ですな。

鵜司ハ 鵜ヲトリスエテ 鮎走ル 早瀬ノ波ニ

船出セスカモ 茂 春

左千夫 結房 船出せすかもとはいかにも仰山で、似つかはしくない、大君の鵜飼か何かのやうだ。

この歌二點にして秀眞君は天にとれり。

水清キ 山里庵ノ アサアケニ ネザメテチレバ

鮎ヲウル聲 秀 眞

左千夫 鮎子とすればよからう 結房 結句難  
この歌二點にして蕨眞君天にとる、



白珠ノ 長玉ヲタツ ヨロシナヘ  
チハコニナメシ  
鮎ノウマ鮎。

左 千 夫

蒔房 珠といふのはどうしてもマンマルイ感じがあるの  
て僕はどうかと思う。秀真 併し非常に奇麗な感じがす  
る、蒔房 それは白珠にごまかされてるのだ、左千夫  
珠といふことを形に見るから丸いといふ感じがするので  
質で見れば何も差支のない話で、普通の語の玉といふ語に  
見てもらはねばならぬ。

この歌二點

八尋網 タグリ引ク手ニ 鮎ノ如 薄月夜目ニ

マヅハシ見ユモ。

茂 春

蒔房 境は得て居ると思うがこのまゝては明瞭を欠いて

る。失名 鮎の如難 左千夫 こゝて網は主でない、客で  
あるものに仰山な形容を用ゐるのは神への供物などには  
よいかかふいふ處で八尋網は先の船出せすかもと同一徹  
てあらう思ふ。

この歌二點

綾花ノ 夕波タチヌ 鮎ムラノ 上ツ瀬サシテ

寄セユクラシモ

蒔 房

左千夫 鮎の寄せて來るといふのは瞬間の光景である、夕  
波といふのは？

この歌二點

蒔房子の天に選びし歌は

鶺使ガ 舟ユオリ立チ 鮎トルト サマレヲ踏テ



鵜ツカフ浅キ瀬

最高点は茂春氏次は秀眞氏。

次會課題は「潮」にして會場は神田美土代町二の一大日本歌  
學會。日は七月二十日(第三日曜)午後二時より、何人にも  
吾等と志を同じうする青年士女の來會は一同に於て大に  
喜ぶ所。

(四)

七月二十日雨の日潮の歌の會を開く、左千夫、葯房、蕨眞、秋水、  
と予の五人が寄り合つたので、作者は尾張の曉雨を加へて  
六人

左千夫君の作は男女の相唱和するに擬して作つてあつて  
潮をかりて戀愛をうたつたものである。

先波ニ 次波マサリ 満ツ潮ノ イヤマス如ク

思ヒタギツモ(唱)

満ツ潮ニ 光リタバヨフ 月影ノ 千々ノオモヒモ

君ガ故コソ(和)

左 千 夫

葯房 先き波ゆ次波まさりは如何にも平和な調であつて  
思ひ激つといふ様な烈しい感じはのらない、和の方で見る  
と何だか思ひが動いてるやうで情熱のあるものらしく思  
はれない。蕨眞 唱よりは落ちると思ふ、千々の思ひは餘  
りに陳腐である。葯房 満つ潮には無理に満つ潮でなく  
てもよいのでこれも一つの欠点である。義郎 僕はそれ  
は欠点でないと思ふ、潮の満ちて來るといふ事が非常に感  
じのいゝ事で、よせて來る潮に月影が碎けてる、それをかり



て直ちに自身の感情を現はしたのは些の無理もないと思  
う、併し餘りに萬葉摸倣であるといふ点は作者に於ても異  
論はあるまい。

黄金雲 一角クヅレ 海津日ノ カクル、カタニ

潮引クラシモ 葯 房

左千夫 潮引くらしもは面白くない、一二三の句までは至  
つて細かに叙して来て居る、然るに五の句に至つて潮引く  
らしもと大きなぼんやりしたものを以て来ては、折角の細  
叙が何の役にも立たなくなる、これはむしろ自帆のかくれ  
て行くのにした方が適切であると思う。 蕨真 印象が至  
つて不明瞭である、秋水 潮の満ちて来る方が上來の句に  
對しては隱當である。 義郎 僕は初めから何だか一二三の

句が落ちつかないやうに思はれたがそれは全く左千夫君  
のいふ如く四五の句と對して均衡がとれて居ないからで  
ある。僕は題の潮を主として考へたものだから、初めが  
ちつかぬとばかり思つて居たがこの歌では初めの三句が  
苦心の所なのであらう。 葯房 結句のちつかぬといふ  
事は何とも答辯が出来ない。

干瀉原 潮満チ渡リ 照ル月モ 山ノ端イデツ時

ハ經ヌラシ(唱)

今シガタト 思ヘルモノヲ 干瀉原 潮満チニケリ

時ハ經ヌラシ(和) 左 千 夫

義郎 これを一番初めにいつた方が都合がよささうであ  
るがさうでもないかしら干瀉原はをかしい干瀉といつた



ので充分あらはれて居る何も原といふ語を加へるにはた  
らない。和の方にはかたといふ同音異義で二つの語が出  
て居るのも拙ではあるまいか。葯房 干潟原はをかしい。  
左千夫 其説は入れる事が出来ない。葯房 和の方の一  
二の句がわからない。左千夫 今しがたといふのは僕等  
の郷里の俗語で今すこし前といふ位のことである。義郎  
僕の國などでも今しがたといふ語はありますよ。葯房  
それは譯りましたが何を今しがたと思へるのかとわから  
ない。左千夫 それは来たといふ語を一の句と二の句と  
の間に入れて考へなければ譯らない、来たとの語を省略し  
てあるのだ。義郎 来たといふ詞はこの一首の上で非常  
に大事な語であつて省く譯にはすこし行きにくくはない

かしらん、葯房 省いて注釋がいろいろでは困つたもの  
だ。左千夫 すこし無理かもしれん。

青海原

霞タナ引キ

ハロクニ

潮路ノ末ノ

白ミテアリ見ユ

葯房

義郎 はろく／＼の句は霞にかゝるのですか白みにかゝ  
るのですか、はろく／＼に霞んでる處がはろく／＼白んで見え  
るのですか、それぢやをかしい。白みてある處は、霞の中で  
すか、霞以外ですか、霞の中、ます／＼以て狐につまゝれる様  
だ。白みたる見ゆとしては句が平凡になるのですか。葯  
房 何にさうぢやない、調子がだれるのだ。左千夫 それ  
はそれでいゝさ、併し霞といふのと、白みたりと見ゆとは矛  
盾して居ると思う。蕨真 どうもそこら邊がをかしいや



うてすな。

満ッ潮ノ 濤ニツカルト 携ハリ 足フミナメテ

タモトホリスモ(唱)

思フドヂ 相タヅサハリ 潮フムト 潮ノネタミニ

裳裾ヌラシツ(和)

左 千 夫

葯房 和の方のは今すこし力瘤をいれてさも潮がねたむ  
らしく、上の方を現はしてほしい、思ふどちらでは友達のやう  
で軽い、二人が抱き合ふてキツスでもしてる處位にしない  
と潮のねたみが、引き立たない。義郎 唱の方は思想の配  
列上、僕は意見がある、つかるといふのはいふまでもなく方  
言であらう、これも僕等の伊豫にもある、併しこゝて何もこ  
の俗語のために直打の上ることでもないから、むしろ普通

の語でいつてはどうかしら、それはさて置き配列の事であ  
るが、三・四・一・二・五とした方がよくはないかと思ふ、二の句は  
直さなければならぬ。葯房。左千夫。さうかもしれんな。

黒潮ノ 濤ニ鱗ウチ ミナミユモ 鯨魚ノトモハ

潮フキノボル

葯 房

左千夫 敬服する事が出来ない(左千夫君この時底頭して  
何もいはぬといふ) 葯房 黒潮は黒瀬川ですよ、義郎 解らない  
事はないでせう。葯房 黒潮は黒瀬川ですよ、義郎 解  
かりすぎる程解かつて居るが何處が作者の趣向であらう  
か、僕は平凡な至つて幼稚な歌であると思ふ、結句は尤もよ  
くしまつて居ると思ふが。葯房 僕はこの歌些得意なの  
だ。



沖ツ風 吹キノマニク

潮サ井ノ

浪ノ玉琴

鳴リヒマクカモ

秋

水

葯房 玉琴などゝ來たらもういやになつちまう、左千夫

鳴り響くと琴とはをかしいなア。葯房 無論駄目だ。

朝日負フ 大鼈ニ騎リ 八潮路ノ 潮ノ八百路ニ

カケメグラバヤ

葯

房

秋水 初旬がをかしい。かけめぐるといふ語は鳥

かなにかの飛ぶやうにきこえる。左千夫 何にかこれに

は故事があるのですか。葯房 支那の神話に旭は黄金の

鼈が負ふて出るのだといふことがあるのです。義郎 こ

れは如何にも幼稚な作で誰しも思ひつくことではあるま

いかと思う、八百路にといつた、には何か仔細があるので

すか、普通ならをの方がよくきゝはしませぬか、にはどうも

調子からいつてもをかしい。

ウヅ潮ノ 卷ノ手グリニ ナビキ敷ク 八百ヒロ

浪ノ 五百ハタノ布

秋

水

葯房 かういふのは全く詞で誤魔化してるので、何等の感

想をも及ぼさない、靡き敷くといふのも巻のたぐりなどゝ

はすこしかけはなれてはゐまいか、それとしても布といふ

感じは潮なり波なりにはのりにくいと思う。

ヤシマネノ イヤ遠廣キ 矢刺浦 夕雲ナビキ

潮サ井ドヨム

蕨

真

葯房 支離滅裂。左千夫 すこしも纏まつてゐない。義

郎 潮さるどよむは「波たちさわぐ」といきさうな所だ。そ



れにしても夕雲靡きは突然だ。

松原ノ 奥ニ潮汲ミ ワカス湯ノ 八尋ノ湯殿

ワガ湯アミセシ 秋 水

左千夫 たゞそれだけでないか、境は得て居るのであるがその目の付け所がわるい、何故進んで湯浴みをした其時其中の光景をいはないのであらう。

滿ッ潮ノ ミチヲヨロシミ 幸船ヲ 磯川ノボル

夕月マケテ 蕨 眞

失名 幸船はをしい、海の幸、山の幸といふから来たのであらうが、それならば海の幸多き船と二句にいはいはねばそれだけの感じがのらない。義郎 夕月と満潮すこしかけあはぬやうです、みをいよろしみまで満つるに夕月まけては

大した時間の相違がある。すべて海の事に日本人が暗いのは不思議だ。

逆巻キニ 潮立チドヨム 瀧神ノ 天雲ヨバヒ

マモノボルラシ 秋 水

葯房 潮頭立つと二の句を改めればよからう。

月ヨミノ ミ神アモラス 沖合ニ 許袁呂許袁呂ニ

ミチ來ル潮ノ音 曉 雨

葯房 一二三冗長に過ぎる感がある。左千夫 月讀のあもらすもどうであらう。葯房 照つてるなら照てると直叙した方がいゝと思ふ。左千夫 中心點がない。

夕潮ノ ミチカナヒナバ 吾脊子ヲ 沖ニヤルベシ

潮ミツナユメ 義 郎



左千夫 結句がどうかしら。 蕨真 私はいゝやうに思ひ  
ます。

木枯ノ アカトキ磯ニ イテ見レバ 北斗ヲヒタス  
ウシホ波カモ 曉 雨

藟房 影がうつつてる所をひたすといつたのであらうが  
それは無理だと思ふ。 義郎 ひたすといふのは波が大き  
く大きく立つて北斗を侵すといふやうなことであらうと  
思ふ、「か」の木枯の果はありけり海の音「よ」より思ひつたこと  
であらう。 藟房 このひたすといふのは漢字の涵の字と  
思ふ。 左千夫 うしほ波は窮して居る

殿曇ル 鳴門荒海 ヒク潮ノ シホノオト高ク  
舟マキクダス 義 郎

藟房 目で見ると耳で聞く事とが混同してはるまい  
か。 左千夫 遠近の難もある。 藟房 四の句がわるいので  
境は充分得てると思はれる。  
これにて論評終り散會。

短歌小梯終



明治三十五年十二月廿五日印刷  
明治三十六年一月一日發行

定價金貳拾五錢

著者 森田 義 良

東京市神田區美土代町二丁目  
一番地大日本歌學會

發行者 上村 才 六

東京市神田區三崎町三丁目  
一番地

印刷者 大野 喜 六

東京市麹町區飯田町四丁目  
三十一番地

東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所 鳴 阜 書 院





# 萬葉私刪

四六版凡百餘頁  
定價金貳拾五錢  
郵税金貳日發行  
二月一日

萬葉集は、新らしく歌を作らうといふものゝ坐右に缺ぐべからざる良書であるけれども間々玉石混交して初學者の判別に苦しむものがある。森田義郎先生『短歌小梯』の稿を終ると共に萬葉二十卷修むる所の短歌を精選して一冊とし、題を別ち部を立て、初學作歌の指針を示された。一度この書を繙かば又萬葉二十卷を見るの要がない。

『短歌小梯』に依つて歌を理解したる者はこの書に依つて摸範たるべき短歌を見られよ。構想、修辭の上に於て大に得る所があるであらう。

神田區三崎町三丁目一番地

## 發行所

## 鳴阜書院



# 大日本歌學會規則

わが韻文を研究し最も他方面に之れを及しかれて一般文藝の振興を謀る。

## 目的

- 一 本會の目的を達せむがために左の事業をなす。
- 一 毎月一回機關雜誌『こゝろの華』を刊行し會員に頒付す。
- 一 時々斯道に有益なる圖書の著述編輯若くは出版をなす。
- 一 臨時研究会若くは親睦會を開く。

## 會員

- 一 本會の趣旨を賛成するものは何人と雖會員たることを得
  - 一 通常會員 入會金參拾錢を納めしもの。
  - 一 特別會員 毎月一回以上の金圓物件を滿二ヶ年間寄贈し若くは一時金二十圓以上の金圓物件を寄贈せるもの。
  - 一 一名譽會員 斯道の大家及び特に本會に裨益を與ふるもの。
- 會員たるむと欲するものは住所氏名生年月職業を記せる名刺に規定の入會金と會費を添へて申込むべし本會は申込を受取り同時に名簿に登録し會員章を送付すべし會員はすべて月額會費拾五錢世 郵送料金壹錢を納付するものとす。
- 退會せんとする時は退會届に會員章を付して届出づべし三ヶ月以上會費を意納せるものは退會者と見做し帳簿整理上除名す。
- 入會は機關雜誌會報欄に於て報告すれども退會除名は報告せず。

## 特權

- 一 會員は左の特權を有す。
- 一 會員は別に定むる添削規程により其長短歌文の添削を受くるべし。
- 一 會員の申込に係る機關雜誌廣告料金は規定の中額とす。

## 添削

- 一 會員の製作は其希望に従ひ左の規定により申込む時は原稿到着後五日間以内に返送すべし。但往復郵便料金は各自辨とす。
  - 一 短歌十首以内 金二拾錢
  - 一 長歌二篇(一篇廿行以内) 金二拾錢
  - 一 文章二篇(一篇廿行以内) 金二拾錢
- 添削にして不審の廉ある時は返稿料を添へて幾回にても其疑惑の氷解する迄質疑を提出し其回答を受くることを得。

## 役員

本會に左の役員を設く

## 事務所

本會事務所を神田區美土代町二丁目一番地に置く

## 補則

現在役員左の如し

## 幹事

- 主幹 伯 爵 東久世通禧
- 幹事 森田 大橋文之 香取秀真

## 神田美土代町二丁目一番地

## 大日本歌學會

### ▽幸徳秋水序

#### 櫻陰無絃琴

四六判貳百頁 定價金貳拾七錢 郵税金六錢

自然を談じ、人事を嘲り、風月を語り、戀愛を説く、序の一節に曰く、夫れ死の悲しきは、有爲の士中道志を齎して死するより悲しきはなし、然れども君の意氣精神は、君の文章と共に留め得て千秋也、と亦以て本書内容の一斑を知るべき也。

### ▽島田沼南序、松村介石序、住谷天來序

#### 嗚呼祖國

四六判百六十頁 定價金貳拾五錢 郵税金四錢

現時我國の偽善と偏狹とは、赤羽巖穴子が熱誠を容るゝ地を餘さず、子茲に於て乎奮然故土を蹶つて、北米の新天地に游はんとし、仍ち此著あり、神氣迸發、光芒陸離、要するに血と涙と、情と熱とは、此書の經と緯とをなせり、

### ▽小島烏水序。小栗風葉序。安岡夢郷著

#### かたかかげ

四六判百七十頁 定價金貳拾錢 郵税金四錢

『かたかかげ』は夢郷子が半生の閱歷なり、落花流水、明月浮雲、或は嘲り、或は悲み、或は笑ふ、此書の多趣多味なる、他多く其類を見ず、其變化の極まりなき、其運筆の縦横なる、而も亦偽ならず、飾らざるの描寫は、更に其特色なるを知るべし。

### ▽詩劍酒客序、中尾撫劍著

#### 外交之秘密

四六判百三十頁 定價金貳拾錢 郵税金四錢

◎附録王宮の一夜  
外交のことたる變幻極りなく、容易に測度し難きものあり、本書は即ち外交場裏に立つ當局者の苦心と其手段とを説き得て經營慘憺たるのみならず、附録は別に在外志士の意氣と其壯學とを寫し出して悲壯沈痛を極めたり。



▽緒方流水著

青眼白眼

四六判百七十頁  
定價金貳拾七錢  
郵税金四錢

著者が文壇に於ける技倆は茲に贅せず、叙次の概要は『掌中麟弄記』、『小説家黑白論』、『評判過去帳』、『直情寸言集』、『半面眞理觀』、『一擲一笑錄』等の數節に分たれ、諸名家の月旦、各作物の批評の如き皆能く肯綮を穿てり。

▽荒木鷺泉著

公開狀

四六判百五十頁  
定價金貳拾五錢  
郵税金四錢

『公開狀』とは何ぞや、之れ當代知名の文士坪内逍遙、尾崎紅葉、幸田露伴、大町桂月、以下四十有餘の諸氏に書を與へ、最も公明に其性行を論し、其作品を評したるものとす、文壇の眞相、文士の平生、一讀の下に歴々たり。

▽上村實劍題詞△川田雪山著

斬馬劍

四六判百五十頁  
定價金貳拾五錢  
郵税金四錢

大臣と曰ひ、華族と曰ひ、博士と曰ひ、學士と曰ふ、洵に英雄たり君子たり、然れども其半面には幾多の缺點と醜行とあり、此書は最も放膽に最も適切に、其秘密を摘發し其私行を暴露し、冷嘲熱罵人をして手に汗を握らしむ。

▽松田竹嶼編

夏爐冬扇

四六判百五十頁  
定價金貳拾五錢  
郵税金四錢

本書は新派に偏せず舊派に黨せず、汎く俳諧を研究しやうと、自ら主張して居る同人諸氏の俳句文集であつて、獨り斯文に志ある士の必携たるのみならず、何人でも一讀閑を消するに適しである疑を容れぬ所である。

詩人業平

四六判百十餘頁  
定價金貳拾錢  
郵税金四錢

▽木村文學士▽與謝野鐵幹子序▽栗嶋狹衣著  
勇敢なる詩人業平は、眞個に日本男子の好標本也、狭衣子研鑽多年始めて此著あり、濃艶の筆よく其資性と態度とを寫し出して些の遺憾なし、附録 落合氏外同人の伊勢物語評話は業平の研究に資すべく、文學上の趣味も亦極めて多し。

▽雨谷一葉庵著

曲亭馬琴

菊半截百五十頁  
定價金拾五錢  
郵税金貳錢

馬琴は實に我國の文壇に於ける一大豪傑也、本書は馬琴が誕生時代の情勢より、其人物其性行其抱負、其家庭、其作物、其交遊、其詩歌俳句等に至るまで之を叙し之を評して更に遺漏なし。

蜀山人

菊半截百七十頁  
定價金拾五錢  
郵税金貳錢

▽勝間舟人著△口繪蜀山人肖像  
舟人君夙に蜀山の性行を慕ひ、其人格學識交遊等或は正面より或は側面より之を論し之を評し復た餘蘊なし其筆路の如き婉曲滑脱特に考證の精密なるは他に見ざる所附するに蜀山の肖像並に蜀山百首を以てせるは所謂錦上の花といふべし。

▽雨谷一葉庵著○口繪芭蕉翁肖像

芭蕉翁

菊半截百五十頁  
定價金拾五錢  
郵税金貳錢

俳聖芭蕉の眞面目は此書に於て始めて見るべし、◎目次◎芭蕉の誕生◎正風以前の俳壇◎芭蕉の遁世◎芭蕉の人物◎蕉翁の詩想◎蕉翁と旅行◎蕉翁の交遊◎蕉翁の示寂◎蕉翁寂後の俳壇◎蕉翁の文章。



▽武田源郎著▽口繪 東西人物肖像數葉

各現代の人物

一隻の眼能く世局の趨勢を看取し。一管の筆正に英傑の心事を描出す。兎起鶻落の勢あり。龍嘯虎鬪の慨あり。案を拍ちて快哉を呼はしむ。當世に志を抱くの青年志士、豈に一讀せずして己むべけんや。

菊判半截百五十頁  
定價金拾五錢  
郵税金貳錢

文學士、渡邊又次郎  
平 井 光 風 共著(口繪定家卿)

百人一首通解

百人一首の名は誰も知つてゐるが、其歌の真味を知るものは極めて稀である。仍て本院は斯道に名ある人々に請ふて本書を發行し、婦女幼童にも分るやう平易に解釋を施し、且つ一々歌人の略傳をも附記してある。

四六判百七十四頁  
定價金拾五錢  
郵税金四錢

▽鳴阜書院編輯局編

教育小哲學

此書は無邪氣であつて、最も面白く最もをかき滑稽小話を集めたものであります。巻を掩ふことを忘れしめるほどです。

正續貳冊  
定價各金八錢  
郵税金貳錢

▽木村小舟著▽口繪

童蒙訓話

著者が多年少年文學の研究に従事せられてあることは人のよく知つて居るところであるが、本書は其筆に成る有益な物語を輯めたものである。家庭の讀物として、學校の賞與品としても、頗る適當である。

漣山人よりの來翰  
四六判百餘頁  
定價金貳拾錢  
郵税金貳錢

▽福澤青嵐著○木曾風景寫真數葉

山紫水明 木曾唱歌

木曾の地たる、風光明媚、旭將軍の名と共に天下に高し。著者曾て蘇山に嘯傲し朝夕推敲せしところの新体詩短歌併せて百餘篇一々曲譜を加へて唱歌に便せり。加ふるに淺井依田兩教諭の作あり。漫ろに優美温和の情清高脫塵の感を惹くべし。

四六判美本  
定價金八錢  
郵税金二錢

▽安岡夢郷著○小峯大羽插畫

花賣少年

此書は言文一致の文体で綴つた少年小説を少年子女諸君に紹介し朝夕其伴侶たらしめやうとして發行した面白き美麗なる本です

菊版四十頁  
定價金四錢  
郵税金五厘

▽鳴阜書院編輯局編纂

算數奇觀

本書は其名の如く古今東西の算話算戲の類を集めて遺す所がない、之を繙いて學友と共に游戲の媒介としたならばしらず、の間に算數の妙理を悟り得るゝことは疑ひない、

四六判百四十七頁  
定價金拾五錢  
郵税金四錢

▽鳴阜書院編輯局編

教育新考物

愉快なる遊戲の内に知らず識らず益を得るのは考物である、本書は天文、地理、歴史、動物、植物、人事、伎體、衣食、雜門、の部類に分けて、巧妙な考物を載せ、一々之に解答を附けてある、

正續貳冊  
定價各金八錢  
郵税金貳錢



▽口繪小嶋法師◎柳澤里恭

十二月月文範

◎上下全貳冊  
◎定價金拾五錢宛  
◎郵税金四錢宛

滔々たる誇張浮華の惡風に溺れて。却て日常實用の文字を遺るゝのは。誠に喜ばしいことでない。本書は十二月月に於ける座右眼前の事物をとりて作文の料とした。誠に少年が文を作る上に於ての好指針である。

▽鳴皋書院編輯局編

故事及形容語

◎四六判全一冊  
◎定價金拾五錢  
◎郵税金四錢

名は故事と形容語と云ふに過ぎないが、其實は和漢美文の精粹を集めて、俗諺と漢語とに各其解釋を施し又其出典を示したものであつて。文を學ぶもの、必ず備へ置くべき好書である。

作文秘訣

四六判百五十頁  
定價金拾五錢  
郵税金四錢

この書は今日の子弟に作文の方針を知らしめんがために著せるものにして青年の初めに撰び取るべき文體を論定し以下三十餘章に分ちて作文の方法並に心得等を詳細に説明したる珍書也。附録 填字、用語集、添削、對句、文學瑣談等

記事文範

四六判百四十七頁  
定價金拾五錢  
郵税金四錢

記事文を作らんとするもの、ために軌範を示すは此書なり。文題は修身、歴史、山河、游覽等に分ち。作者は古來屈指の文章家にとり。各題ともに一々批評を加へ。標記には作者の注意すべき件々を示したり。

▽岡野知十題詞▽鹿島櫻菴著

洋行みやげ

口繪藝妓  
俳優肖像  
附錄  
演藝談

洋行みやげは烏森藝妓が洋行中に於ける珍談やら丸一太神樂鏡味仙太郎の洋行中に經たる奇話やらを集めた珍本で一讀巴里に遊び、倫敦に行くの思あらしめる。

▽中山古洞挿畫◎上村實劍題詞◎伊藤阿山著

政治小説 東洋の波瀾

定價金貳拾錢  
郵税金四錢  
紙數貳百三十頁

男子が君國に報ゆるの心事と女兒が良人をも思ふの情緒とは此書の經緯をなすもの。艶麗の筆。沈痛の想。人をして喜ばしめ人をして悲ましむ。而も些の卑猥に涉らざるは。社會上下の家庭に入りて何人の伴侶たるをも得へし。

◎森田義郎著

短歌小梯

四六判約百七十頁  
定價金貳拾五錢  
郵税金四錢

よく世に行はれて居る本で「ふるの山文」和歌體の塵「などいふ」がある、近頃また「作歌自在」「詠歌自在」などいふやうな本が方々から發刊されては居るが要するに大同小異であつて、單に卅一字を並べる者の爲めには恰好の書かも知れぬが、今日新しき文學として生命ある歌を作るもの、ためには餘り其用をなさぬ、本書は陳套を脱したる獨創の作であつて先づ總論に於てすべて詩を論じ、以て其本來の性質を明にし、以下次を追ふて句法より修辭に及び、古來の名歌を品騰し、進んで短歌の極致を論じ、頗る明細を極めて居る、苟も短歌に志あるの徒は勿論、短歌を知らんとせらるゝの士は、一讀せねばならぬこと、信ずる。



鳴草書院出版圖書目錄

夏爐冬扇	角力新話	撰學民心得	さく月	有明	かたかけ	小外交の秘密	小東洋の波瀾	大平洋論	青眼白眼	公開狀	斬馬劍	嗚呼祖國
同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同
四十二錢	四十二錢	四十二錢	四十五錢	四十五錢	四十二錢	四十二錢	四十二錢	四十二錢	四十二錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢
閨秀日記文	十二月文範	一致名家文集	作文秘訣	故事及形容語	芭蕉翁	蜀山人	曲亭馬琴	詩人業平	現代の人物	洋行みやげ	百人一首通解	無絃琴
同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同
四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢
短歌小梯	續新考物	新考物	續小哲學(同上)	小哲學(笑林)	英小學生徒	管相公	花賣少年	家庭童蒙訓話	山紫水明會唱歌	算數奇觀	記事文範	遊記文範
同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同
四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢	四十五錢